

富山県小杉町・大門町
小杉流通業務団地内遺跡群

第2次緊急発掘調査概要



1980年3月

富山県教育委員会

例 言

1. 本書は、小杉流通業務団地建設の造成工事に先立ち実施した小杉流通業務団地内遺跡群（射水郡小杉町・大門町所在）の第2次緊急発掘調査の概要である。

2. 調査は、第1期試掘調査と第2期の本調査に分けて実施した。調査期間・発掘面積はつぎのとおりである。

第1期 昭和54年4月16日～昭和54年6月14日まで（延42日間・伐採・かたづけ作業を含む。）

No 4 遺跡	5月18日	延1日	約 153m ²	No13 遺跡	5月18日～6月8日	延5日	約 200m ²
No 6 遺跡	5月17日～6月12日	延4日	約 480m ²	No14 遺跡	5月22日	延1日	
No 7 遺跡	5月16日～5月17日	延2日	約 950m ²	No15 遺跡	5月31日～6月8日	延2日	約 465m ²
No 8 遺跡	5月15日～6月12日	延4日	約 100m ²	No16 遺跡	5月20日～6月8日	延5日	約 810m ²
No 9 遺跡	5月15日～5月16日	延2日	約 200m ²	No18 遺跡	5月24日～6月6日	延9日	約 1,500m ²
No10 遺跡	5月16日	延1日	約 200m ²	No31 遺跡	5月22日～5月23日	延2日	約 60m ²
No11 遺跡	6月4日～6月11日	延3日	約 324m ²				

第2期 昭和54年6月25日～昭和54年12月28日（延135日間）

No 9 遺跡	12月19日	延1日	約 26m ²	No17 遺跡	6月9日～10月26日	延74日	約 1,200m ²
No13 遺跡	6月25日～7月12日	延12日	約 1,700m ²	No18 遺跡			
No16 遺跡	7月9日～12月28日	延76日	約 2,400m ²	A地区	6月27日～7月30日	延19日	約 1,200m ²

3. 調査は、富山県土木部用地課・富山県土地開発公社から委託を受けて、富山県教育委員会が実施した。調査にあたっては、文化庁記念物課の指導と吉田組・南郷建設の協力を得た。

4. 調査参加者はつぎのとおりである。

富山県埋蔵文化財センター上野章・池野正男（以上調査担当者）、橋本正・岸本雅敏・山本正敏・宮田進一・酒井重洋・神保孝造・久々忠義・橋本正春・法政大学卒業生福井正博（以上副査員）、藤井武雄・早川繁作・早川国一・庄谷政次・丸山信一・山田為次郎・平野光博・若瀬豊次・青山森明・寺家常雄・浅井長松・若林虎一・林三郎・勝山重雄・田畠松次・大塚巖・浦島修治・京角義作・京角秀雄・上谷佐七・中谷秀之・山屋庄市・野手義盛・高桑利之介・河内繁雄・野利雄・江尻栄作・光地精一・土佐重雄・佐野吉造・坂井庄一・竹田太市・権原加津也・苗田史郎・成瀬英夫・坂野和哉・竹本良成・江尻弘・寺西寿・新垣利幸・別所恵美子・高木一子・清水しづ子・角地はつえ・城勘きみの・山中保子・大橋しづよ・藤井みさを・広坂百合子・木和田靖子・柳瀬かずえ・宮下りよ・瀬野たよ・岡田和子・岩瀬貞子・場家はるる・五十嵐富子・五十嵐春子・高林みどり・平野つや子・若林久子・奥村あや・奥井のえ・山藤すえ・市崎たみ子・青山あや・奥井のえ・中田こと・舟瀬はな・山藤アヤ子・中村きみ・野美好・徳井咲子・堀きよ・篠原やよい・肥田花子・水田かの・篠原のぶえ・寺西そとえ・丹保とし子・光地ヨシミ・光地よそえ・寺口あき子・小西笑子・久野かのひ・鷹島和子・坂井みさこ・松原幸子

事務局は、富山県埋蔵文化財センターにおき、主任川口稔・文化財保護主事山本正敏が調査事務を担当し、所長竹内俊一が総括した。

5. 発掘調査期間中及び資料整理期間中、諸先生・諸氏の来訪があり、指導助言を得た。記して謝意を表する。

奈良國立文化財研究所平城宮跡発掘調査部吉田恵二・富山大学考古学研究室教授秋山進午・講師和田晴吾・金沢美南工芸大学講師小島俊彰・富山考古学会員庭照夫・西井龍儀・往藏久雄・藤田富士夫・舟崎久雄・伊藤隆三・中山修宏の各氏

6. 須恵器窯跡の考古地磁器測定については、富山大学理学部教授広岡公夫氏にお願いした。

7. 調査期間中、遺物整理及び本書の作成にいたるまで一貫して、橋本正氏の指導助言を得た。

8. 遺物の整理・復元・実測・製図は、岸本雅敏・山本正敏・神保孝造・福井正博・遺物の撮影は狩野聰・橋本正春の協力を得た。編集・執筆は上野・池野が分担して行い、各々の責は本文に記した。

目 次

例 言

I 地形と周辺の遺跡	1
第1図 遺跡の位置と周辺の遺跡	1
II 試掘調査の概要	2
1. 調査の経緯	2
表1 昭和54年度試掘調査結果一覧表	2
第2図 小杉流通業務団地内及び周辺の遺跡分布図	3
2. 各遺跡の概要	4
第3図 試掘調査出土遺物実測図	4
第4図 試掘調査出土遺物実測図	5
III 調査の概要	6
1. №9遺跡	6
第5図 №9遺跡地形図	6
第6図 溝実測図	6
2. №13遺跡	6
第7図 №13遺跡地形図	6
第8図 遺構実測図	7
第9図 塗状遺構実測図	7
3. №16遺跡	8
第10図 縄文時代の遺物実測図	8
第11図 №16・17遺跡の地形と区割図	8
第12図 №16・17遺跡遺構全体図	
第13図 第3号墓跡実測図	10
第14図 第3号墓跡出土遺物実測図	11
第15図 第2号墓一Ⅱ実測図	12
第16図 第2号墓一Ⅰ実測図	13
第17図 墓体内出土遺物	14
第18図 第2号墓灰層出土遺物実測図	16
第19図 第2号墓灰層出土遺物実測図	17
第20図 第2号墓灰層出土遺物実測図	18
第21図 第2号墓灰層出土遺物実測図	19
第22図 第2号墓灰層出土遺物実測図	20
第23図 第2号墓灰層出土遺物実測図	21
第24図 第2号墓灰層出土遺物実測図	22
第25図 第2号墓灰層出土遺物実測図	23
第26図 第2号墓灰層出土遺物実測図	24
第27図 第2号住居跡・出土遺物実測図	25
第28図 第1号段状遺構出土遺物実測図	26
第29図 遺構実測図	27
第30図 遺構実測図	27
第31図 第3・4・5号穴遺構外出土遺物	28
4. №17遺跡	29
第32図 第1号墳埋葬施設	29
第33図 勾玉実測図	30
第34図 第1号木棺墓・封土等出土遺物実測図	30
第35図 第1号境外形図	
5. №18遺跡 A地区	31
第36図 №18遺跡 A地区的区割図及び遺構全体図	31
第37図 遺構・出土遺物実測図	32
IV まとめ	33
表2 器種表	35
参考文献	
写真図版	

I 地形と周辺の遺跡

小杉流通業務団地建設予定地に所在する遺跡群は、北陸高速自動車国道小杉インターチェンジの西方丘陵中に位置し、その行政区画は、射水郡小杉町・大門町に属する。

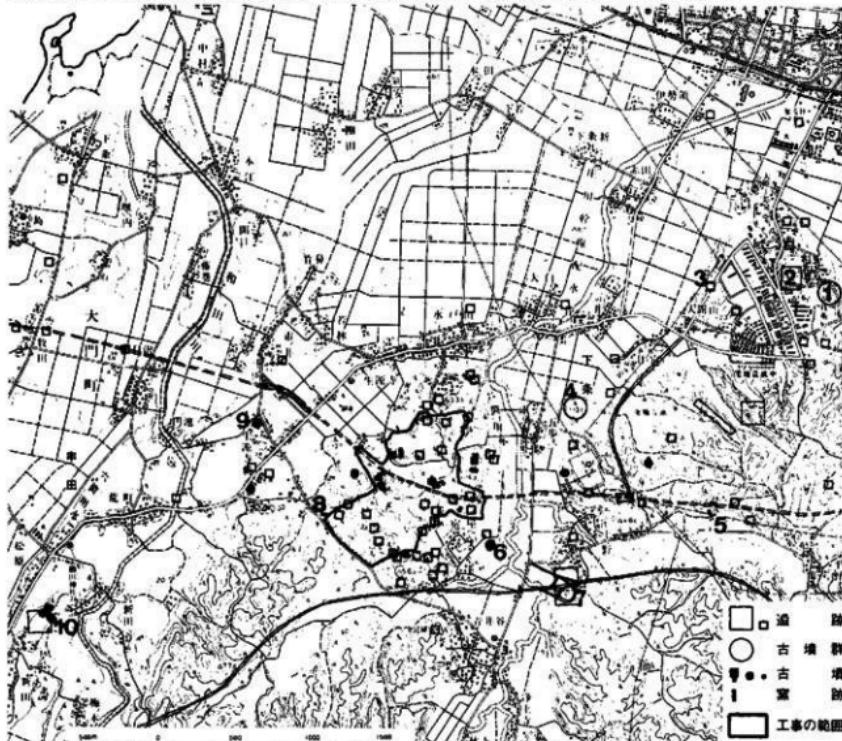
この一帯は、射水平野に接する標高10m～60mの起伏に富む丘陵群からなり、俗に金山丘陵と呼称されている。

金山丘陵は、新生代第3紀の泥岩・砂岩層からなる青井谷泥岩層で構成される。丘陵北端では良質の粘土が産し、これを利用した瓦産業が行われている。

近年この丘陵一帯で、北陸高速自動車道の建設、新産都市計画に伴うベットタウンとしての団地造成、県民公園の建設などの開発が急増し、それと共に発掘調査例も増加している。

周辺の代表的な遺跡としては、北陸の绳文時代中期土器編年の指標となった、串田新遺跡が西方約2.5kmにあり、また弥生時代では北方約3.0kmに伊勢領遺跡が、北々東約2kmに後期の方形周溝墓4基等の発見された圓山遺跡、弥生時代末期・古墳時代後期の大集落跡である東方約1kmの上野遺跡等調査された遺跡が多い。

古墳では隣接東丘陵上に存在する約43mの前方後方墳をもつ五歩一古墳群、直径約36mの古墳時代中期古墳とされる北内約1kmの大塚古墳、後期群集墳として独立丘陵中に点在する東方約1kmの山王宮古墳群が知られている。



第1図 遺跡の位置と周辺の遺跡 1.二ツ山古墳群 2.中山南遺跡 3.岡山遺跡 4.山王宮古墳群 5.天池窓跡
6.宿屋古墳 7.上野遺跡 8.生源寺窓跡 9.大塚古墳 10.串田新遺跡

II 試掘調査の概要

1 調査の経緯

富山県知事部局では、昭和48年小杉流通業務団地の建設の決定がなされた。そこで富山県教育委員会では、昭和51年12月に建設予定地約51ha及び周辺地区的遺跡分布調査を行い、予定地で31ヶ所の新たな遺跡を発見した。

この分布調査結果にもとづいて、富山県土木部、富山県土地開発公社、富山県教育委員会の三者間で何度も協議を重ね、以下の第1次、第2次発掘調査を実施してきた。

第1次調査は、昭和52年11月から昭和53年12月まで行ったNo.20遺跡の発掘である。この調査は小杉流通業務団地の代替地に係る遺跡地を対象としたもので、代替地の試掘調査と遺構の少い標高25m以上の丘陵上の記録保存調査であった。この調査で奈良時代の住居跡・穴・段状遺構等を検出した(池野他 1979)。

第2次調査は、第1期の試掘調査(昭和54年4月16日~6月14日までの延42日間)と第2期の記録保存調査(昭和54年6月25日~12月28日までの延135日間)に分される。

第1期試掘調査は、建設計画の第1期工事区に含まれる11遺跡と工事区に隣接する2遺跡の計13遺跡に対して、遺跡の範囲とその概要を把握する目的で行った。調査は遺跡の現状が山林及び荒蕪地だったことから前作業の伐採、かたずけに調査期間の多くを費やしたが、遺跡の範囲の他に次の点を明らかにできた。

1. 縄文時代の遺跡は、明確な遺構が確認できず、遺物が散布する程度の小規模な遺跡だった。

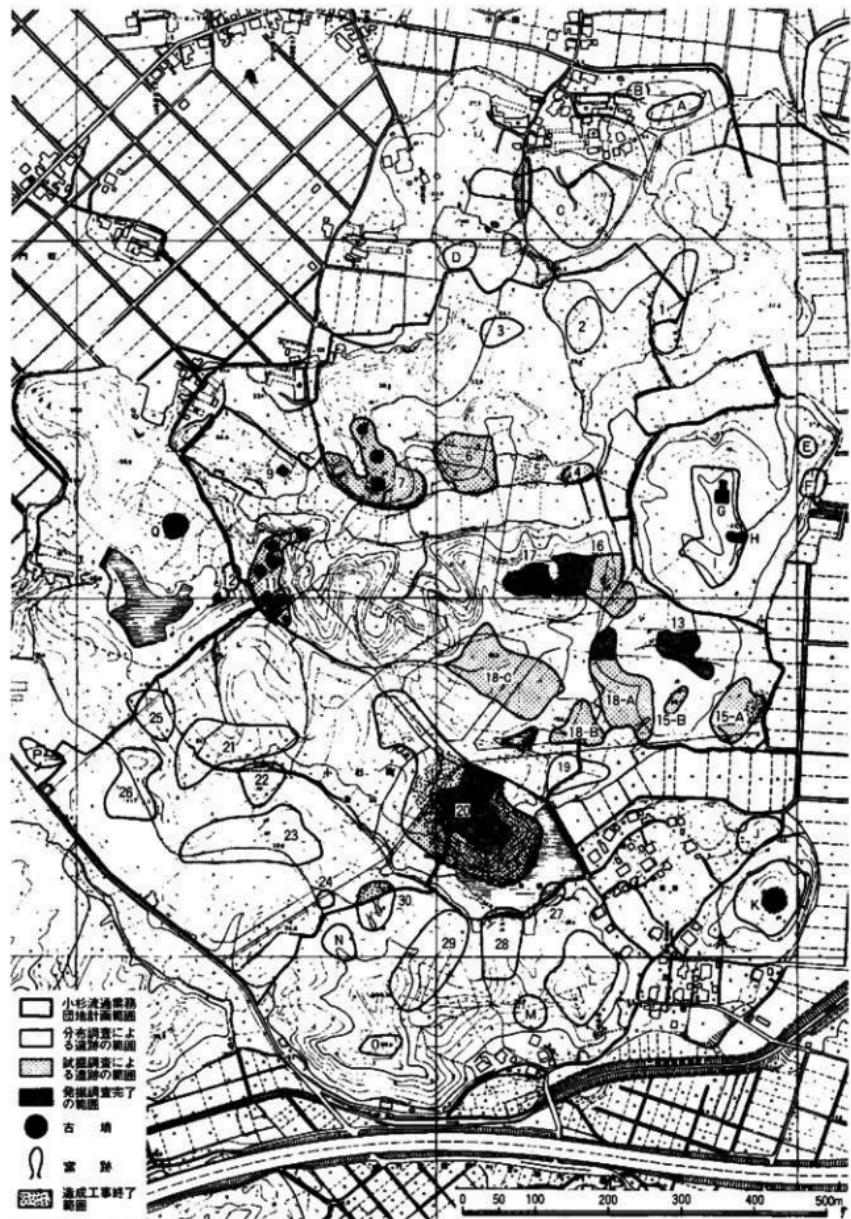
2. 遺跡の営まれた時代は、主に古墳時代後期と奈良時代の二時代があり、各々集落跡と須恵器窯跡の生産遺跡を中心とする。他に古墳が多数所在することで、この地域における歴史を知るうえで重要な遺跡群と理解された。

第2期調査は、第1期建設計画の中でも特に急ぐ幹線道路敷に係る5遺跡を発掘対象とした。

(上野)

遺跡名	位置名	所在地	遺跡の範囲	発掘の進捗	時代	種類	備考
No. 4	—	大門町 水戸田字石名山	約 500m ²	約153m ²	古 墓	集落跡?	造成工事の終了により調査は残った遺跡を発掘
No. 6	—	*	約 5,600m ²	約480m ²	古墳・後期	集 落 跡	東面斜面に住居跡・溝等の遺構密度が高い
No. 7	No. 7	*	約 7,500m ²	約950m ²	古墳跡・円墳 3基 須恵器窯跡 3基	—	古跡1 基保存状態良好。2場は畠地の隔壁跡と工事用道路により大幅を失っている。古墳は、縄溝の一部を発見。北より遺跡は大約3m×20m×14mの大きさ。住居跡・溝・穴等の遺構は丘陵全般にある。
	No. 8	*	—	—			分布調査で縄文土器若干を採集。発掘では遺物未検出
No. 9	—	*	約 100m ²	—	—	—	分布調査で縄文土器若干を採集。発掘では遺物未検出
No.10	大門町 水戸田字頃尺	—	—	約3200m ²	—	—	分布調査で縄文土器若干を採集。発掘では遺物未検出
No. 11	—	*	約 5,000m ²	約324m ²	古 墓	円墳8基	遺跡を残す1/4基まで幅3m、10m×13m×20mの大きさ。東側に古墳の通溝がある。北より遺跡は大約3m×15m×15m×20mの大きさ
No.13	No.13	小鶴町 水戸田字丸山	—	約200m ²	奈良～平安	—	試掘後本調査を実施。塗状遺構は時代不明
	No.14	*	—	約200m ²			
No.15	A地区	No.15 青井谷字丸山	約 5,800m ²	約390m ²	古墳後期 奈良	墓 跡	遺跡の中心は作物・果樹の植付により未調査
	B地区	*	約 800m ²	約 75m ²	古 墓 ?	丘陵尾根部の試掘区で溝2本を確認	
No. 16	—	大門町 水戸田字頃尺	約 7,000m ²	約810m ²	縄文・古墳 須恵器窯跡 後期・奈良	3基	縄文帯で残る遺跡の約半分を除き、本調査を実施第1分・第2分窯跡の間に多くの遺構がある
No. 17	—	*	約 1,200m ²	—	—	—	外郭調査後、本調査を実施
No.18	A地区	No.18 小鶴町 青井谷字丸山	約 6,300m ²	約595m ²	京 良 古墳跡	—	南側斜面に遺構多い。遺跡の北側斜面は道路敷予定地につき本調査を実施
	B地区	*	約 3,000m ²	約117m ²	集 落 跡	—	遺跡の一帯は作物の植付けにより未調査。遺構密度はあまり高くない
	C地区	*	約 10,000m ²	約816m ²	集 落 跡	—	丘陵上は特に試掘調査が必要。斜面には溝があり谷部は黒色土中に遺構がある
計10遺跡	変更6	2 町	—	—	—	—	遺構・遺物は未検出

表1 昭和54年度 試掘調査結果一覧



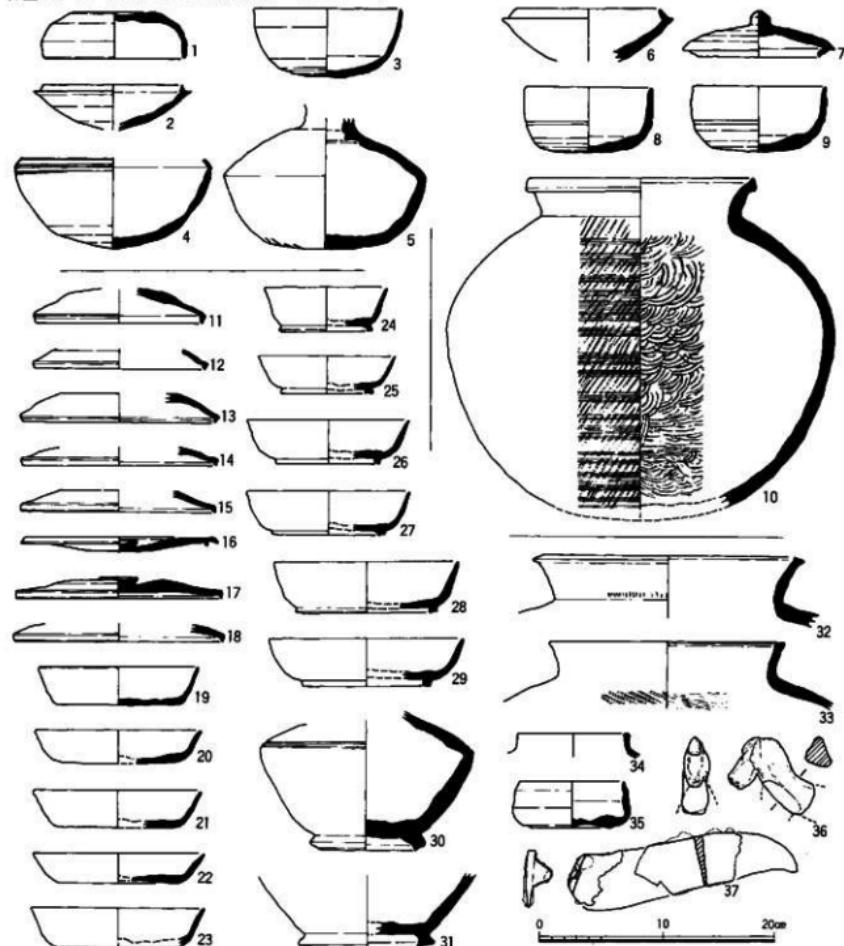
第2図 小杉流通業務団地計画地内及び周辺の遺跡分布図

2 各遺跡の概要

試掘調査の結果（表1）、12ヶ所の遺跡が確認され、各種の遺構、遺物（第3・4図）が検出された。以下、出土遺物を中心に幾つかの遺跡の概略を述べる。

No 7 遺跡（第3図1～5）丘陵斜面西側に須恵器窯跡3基があり、東にのびる斜面上には、住居跡、溝、穴等が広がる。また丘陵尾根には、円墳3基がある。1・2は、窯跡周辺から、3～5は、集落跡周辺から出土した。

No 6 遺跡（第3図6～10）No 7 遺跡とは、小さな谷によって隔てられる。遺構は、東・西斜面上に広がり、特に東斜面上には、住居跡、溝、穴等の遺構が多い。6は、西斜面谷部から、7～9は、東斜面上から出土し、7・8は、杯蓋セットになる。10は、東斜面谷部から出土した。



第3図 試掘調査出土遺物実測図

1～5、No 7 遺跡、6～10、No.6 遺跡
11～36、No.16 遺跡第1号窯灰原、37、No.16 遺跡試掘トレンチ
(36は人形)

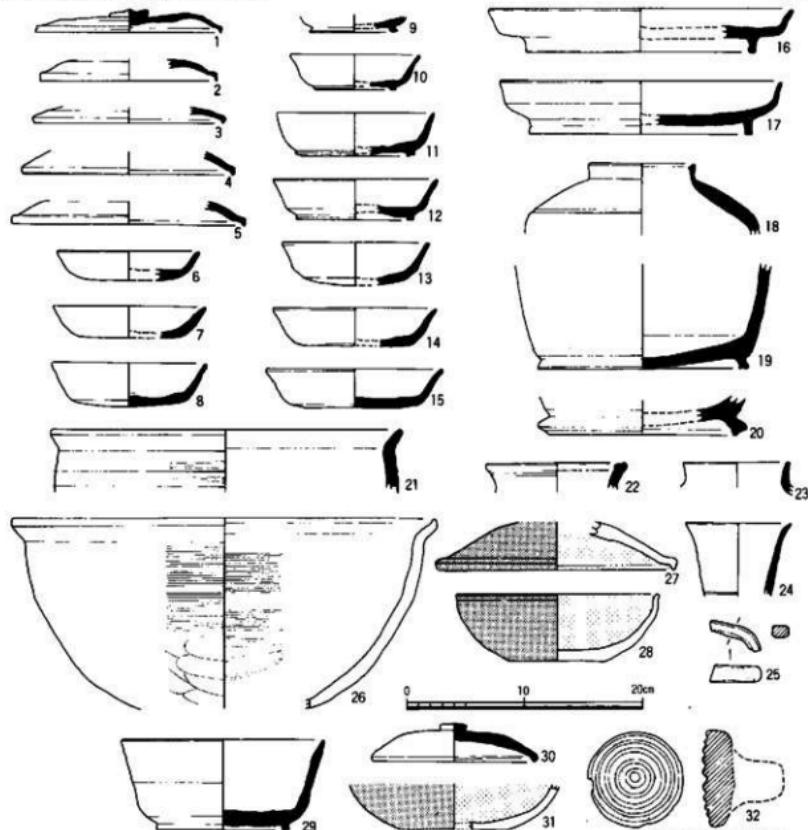
No 6・7遺跡は、須恵器生産及びそれに関連した道路で、時期的には、6世紀後半～7世紀初頭に位置づけられる。同期の周辺遺跡には、西に生源寺窯跡〔塩 1964〕、北東に小杉流通業務団地隣接A（窯跡？）、C遺跡と、比較的平野部に近い丘陵にみられる。また、谷を隔てた南側丘陵尾根には、8基の円墳があり、関連が注目される。

No 16遺跡（第3回11～37）小杉流通業務団地内中央部の丘陵上に位置し、須恵器窯跡3基、住居跡等の関連遺構が確認された。11～36は、本調査を実施しなかった第1号窯跡灰原出土遺物である。また、37は、第1号窯跡の西側に位置する遺構から出土した鐵鎌である。

No 18遺跡A地区（第4回1～28）須恵器窯跡1基、住居跡、溝、穴等を確認した。1～25は、第1号窯跡灰原出土、26～28は、窯跡に隣接する住居跡から出土した。

No 18遺跡C地区（第4回29～32）丘陵部から谷部に広がる集落遺跡で、住居跡、溝、穴等を確認した。32は、土器調整時に用いた土師質の内面あて具である。

No 16遺跡、No 18遺跡A・C地区は、須恵器生産及び、それに伴なう集落跡と考えられ、時期的には、8世紀前葉～中頃にかけて形成された遺跡であろう。（池野）



第4図 試掘調査出土遺物実測図

1～25. No. 18遺跡A地区第1号窯灰原 26～28. No. 18遺跡A地区第2号住居跡
29～32. No. 18遺跡C地区

III 調査の概要

1 No.9 遺跡

(1) 調査の経緯

分布調査の際には、縄文土器の散布が見られたが、試掘調査の結果、当該期の遺構、遺物は検出されなかった。ただ、標高約30mの北斜面上において、落ち込みを確認し、当地区を対象として本調査を実施した。

(2) 立地（第5図）

No.9 遺跡は、小杉流通業務団地計画地内の北西縁辺部にあたり、南東にのびる丘陵尾根先端部に位置する。

(3) 溝（第6図）

部分的調査のため全容は不明であるが、最大幅2.7m、最大深80cmの規模で北にのび、途中で鋭角に東側に折れ曲がる溝である。出土遺物は無く時期不明。

2 No.13 遺跡

(1) 調査の経緯

試掘調査の結果、古墳の可能性がある地区で溝、丘陵尾根から北斜面にかけては、穴が確認された。

このため、本調査を実施することとなり、墳状遺構、穴13カ所を検出した。

(2) 立地（第7図）

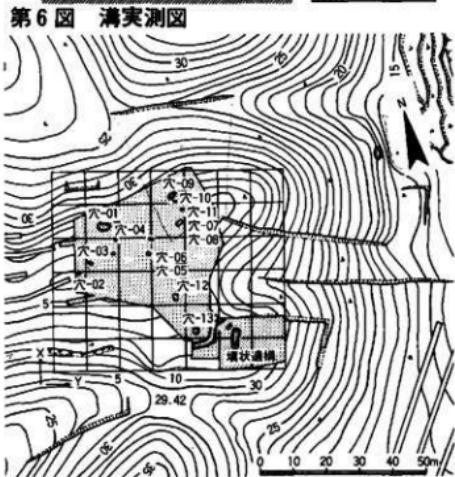
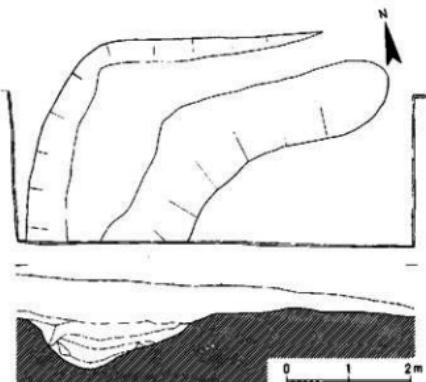
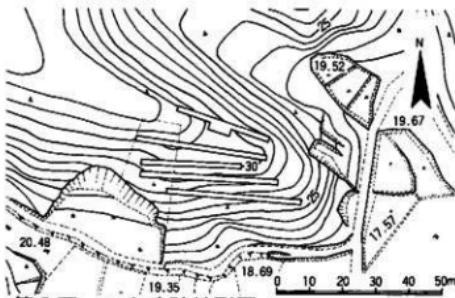
No.13 遺跡は、小杉流通業務団地計画地内の東縁辺部にあたり、青井谷が一望できる丘陵尾根上に位置する。

北側の小谷を挟んだ丘陵尾根上に五歩一古墳群、南側に小谷で隔てた丘陵尾根上にNo.15 遺跡B地区（古墳？）、さらに南には、宿屋古墳がある。

(3) 墳状遺構（第9図）

東にのびる小丘陵尾根上に築かれる。西側は、長さ 6.1m、幅 1.6m の直線的な溝によって尾根切断が行なわれている。北側部分は、地山整形が認められるが、東・南側は旧地形を残す。

盛土は、赤褐色土層が田地表面上に数cm残るのみで、大部分は流出したものと考えられる。



埋葬施設は、地山層に掘り込まれておらず検出することが出来なかった。遺構からの出土遺物は無く時期は不明である。

当遺構の特徴を要約すると、①尾根切断を行なう。②地山整形を行なう。③盛土が存在したと考えられる等の現象は、古墳の可能性を示すが、①主体部が見られない。②出土遺物が無く時期判断が出来ないことから、墳状遺構と呼称した。

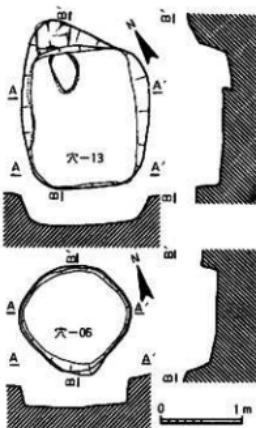
(4) 穴-13 (第8図)

1.7・1.6mの正方形のプランをもち、壁は、ほぼ垂直に約0.3m掘り込まれ、熱を受けた痕跡を顕著に残す。床面は平坦で、部分的に焼土塊が見られる。

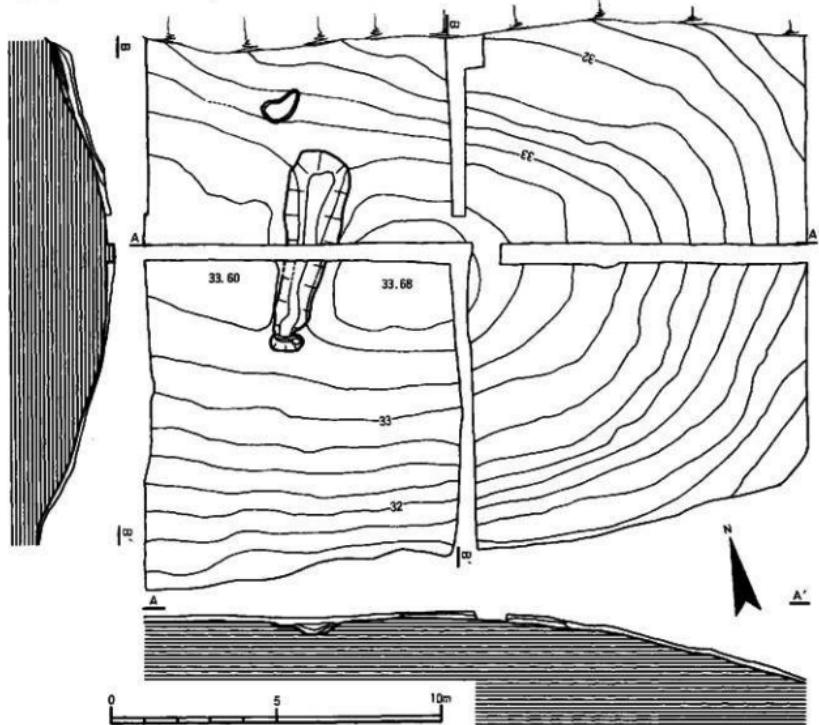
(5) 穴-06 (第8図)

約1.3mの円形のプランをもち、壁は垂直に掘り込まれ、熱を受けた痕跡は顕著で、焼土化している。床面は平坦で、焼土塊がみられ、厚い炭化層が、覆土に堆積している。

穴からの出土遺物は、非常に少なく、時期決定出来る破片も無いが、奈良～平安時代の遺構と考えて大過ないであろう。(池野)



第8図 遺構実測図



第9図 墳状遺構実測図

3 No.16遺跡

(1) 立地 (第11・12図)

遺跡は、東方に細長く張り出す丘陵支脈の基部・丘陵南側斜面及び谷頭にかけて存在し、3基の須恵器窯跡を中心とする。

(2) 調査経過と層序

今回の調査では、造成工事に係る遺跡の西半分を発掘し、緑地帯として残る予定の東側は、調査の対象外とした。

遺跡の層序は、丘陵上及び斜面部において、20~30cmの茶褐色の表土層が堆積し、地山の黄褐色粘質土に移行する。谷側ではこの両層の間に暗茶褐色粘質土が入り、谷に寄るほど層厚を増す。

調査は、対象地約2,400m²の全面を拂土し、古墳時代後期の窯跡1、奈良時代の窯跡1、竪式住居跡1、段状造構1、穴9を発掘した。

(3) 繩文時代の遺物 (第10図1~6)

遺物は土器約30点、打製石斧数点、磨製石斧1点を数える。

1は、2条の沈線間に半截竹箇の刺突を行ったもの、3は、幅広の沈線が施文され、沈線の基点を深くくぼます。頭部下は縱縞文をこころがしており、中期後半に含まれる。



第10図 繩文時代の遺物実測図



第11図 No.16・17遺跡の地形と区割図

(4) 古墳時代の遺構と遺物

①第3号窯跡（第13図）

立地と窯体規模（第12図）

第3号窯跡は、南東方向に張り出した小丘陵尾根に近い東側斜面に位置する。窯体は、丘陵斜面の等高線に直行して構築され、標高は、焚口付近で25.40m、煙りだしピット底面で29mをはかり、谷部との比高差は約8mである。窯体主軸方向は、S-25°-Wである。遺存状態は、前庭部から煙りだしピットまで完存しており、また、天井部が一部残るなど相対的に良い。

規模は、全長約10.5m、最大幅1.5m、地山層上面から床までの最大深2.1mをはかる。煙りだしピットからは、等高線を斜方向にきって、排水溝が構築される。窯体の埋没過程は、窯が放棄された後、燃焼部に近い焼成部の大井がまず落下し煙りだし部から土が流れ込み、いくらかの堆積の後、他の天井部が落としたものと推定される。

前庭部 焚口方向に広がる急斜面上に、黄褐色粘質地山層を盛ることによって、長さ約2.6m、幅約4mの規模で、テラス状に構築されており、焚口方向に凹地となる。数回の改修が認められ、随時、面が高くなる。

焚口 床幅0.9m、壁は、ほぼ垂直に立ちあがり、開口部分では、青灰色還元層がみられず、赤色酸化層を示す。床の平面形態は、燃焼部と直線的に結ばれる。天井は、地山層上面より上位に位置していたと考えられる。

燃焼部 焚口と焼成部がはじまる傾斜変換部との間で、床幅1.3m、焚口からの長さ2.6mをはかる。壁は、丸みをもって天井部に登り、焼成部とは、広がりをもって連なる。床は、焚口よりわずかに低くなり、たちわりD-D'・E-E'間にには、炭化層がみられた。地山層上面からの深さは、1.6mである。

焼成部 煙りだしピットまで長さ約6.5m、床の最大幅は中央部にあり約1.6mをはかる。床は、弓なりに返りあがり、傾斜角度は、中央部で30度、もっとも急なところでは40度をはかる。たちわりC-C'付近の壁は、砂層にあたり、遺存状態が悪い。煙りだしピットに接する部分の天井は、やや土圧により変形しながら残る（たちわりA-A'）。

出土遺物は、焼き台に使用された大甕の破片、河原石で、大部分が燃焼部との傾斜変換部付近に流れ落ち、原位置を保たない。

煙りだし 燃成部から登ってきた床は、直径約2mの円形ピット底面に至る特殊な形態をもつ。底面には、一部赤色酸化層のみがみられ、青灰色還元層はみられない。窯体の還元化時には、煙りだしピットは含まれず、焼成部との境で閉鎖されたと考えられる。

排水溝 煙りだし円形ピットの南西壁際底面をわずかに掘り込み、等高線の斜方向にのびる長さ約6mの溝である。溝は、「U」字状に掘られ、底面からは、大甕の破片が出土した。

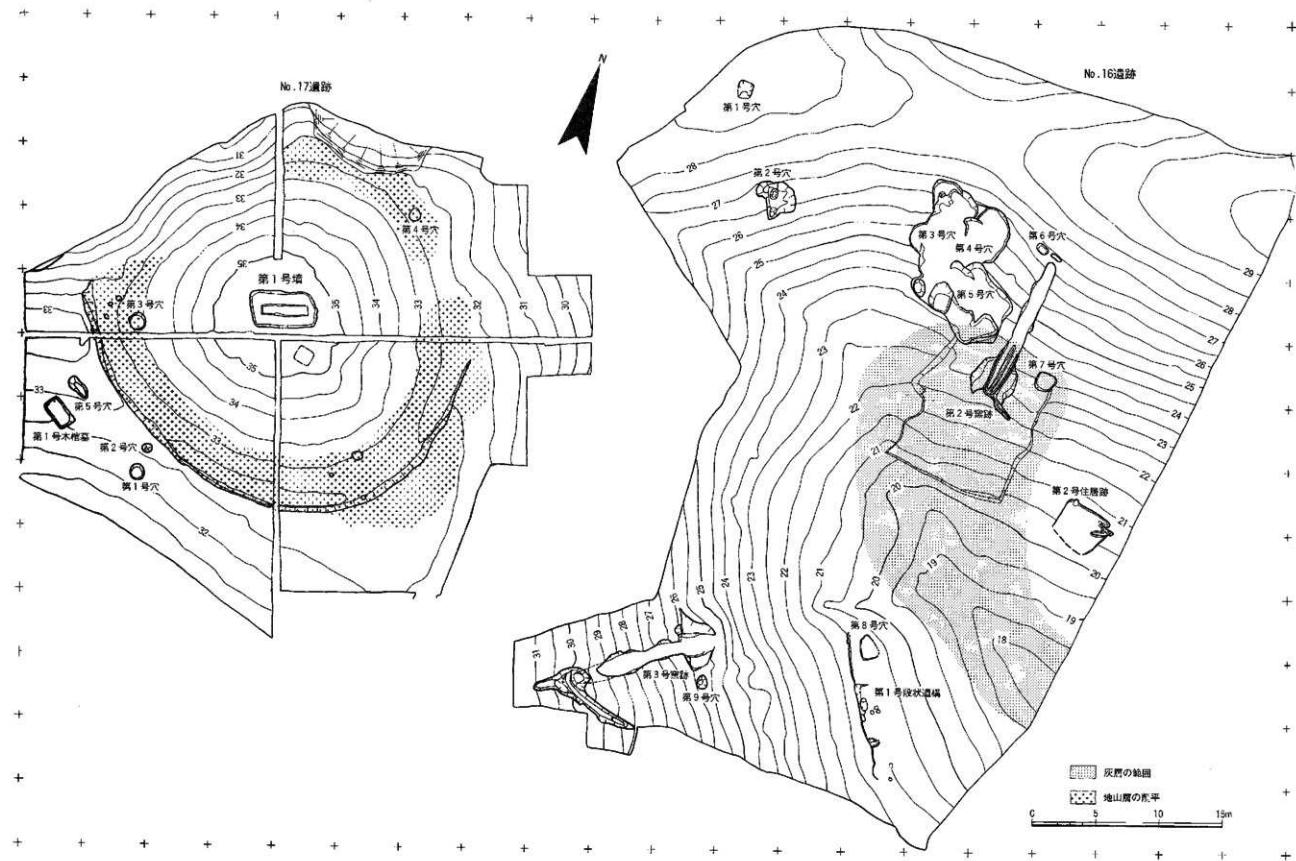
灰塗 前庭部下方には、灰層と呼べるものはない。ただ、段状造構及び周辺からは、若干の遺物が出土している。

窯体構築の方法 崩れ落ちた窯体の覆土は、大部分ベースとなる黄褐色粘質地山層であり、その上面に黒褐色土層がレンズ状に堆積する。崩れ落ちた土層と地山層との境界は、垂直で、床面幅を示し、黒褐色土層の厚さが、崩れ落ちた天井の高さを示す部分がある。また、床全体が地山層上面より非常に低い位置にあることなどから、少なくとも焼成部より奥は、掘り抜きで、燃焼部、焚口は、半地下式に掘り込み、天井部を覆う構築方法が推定される。

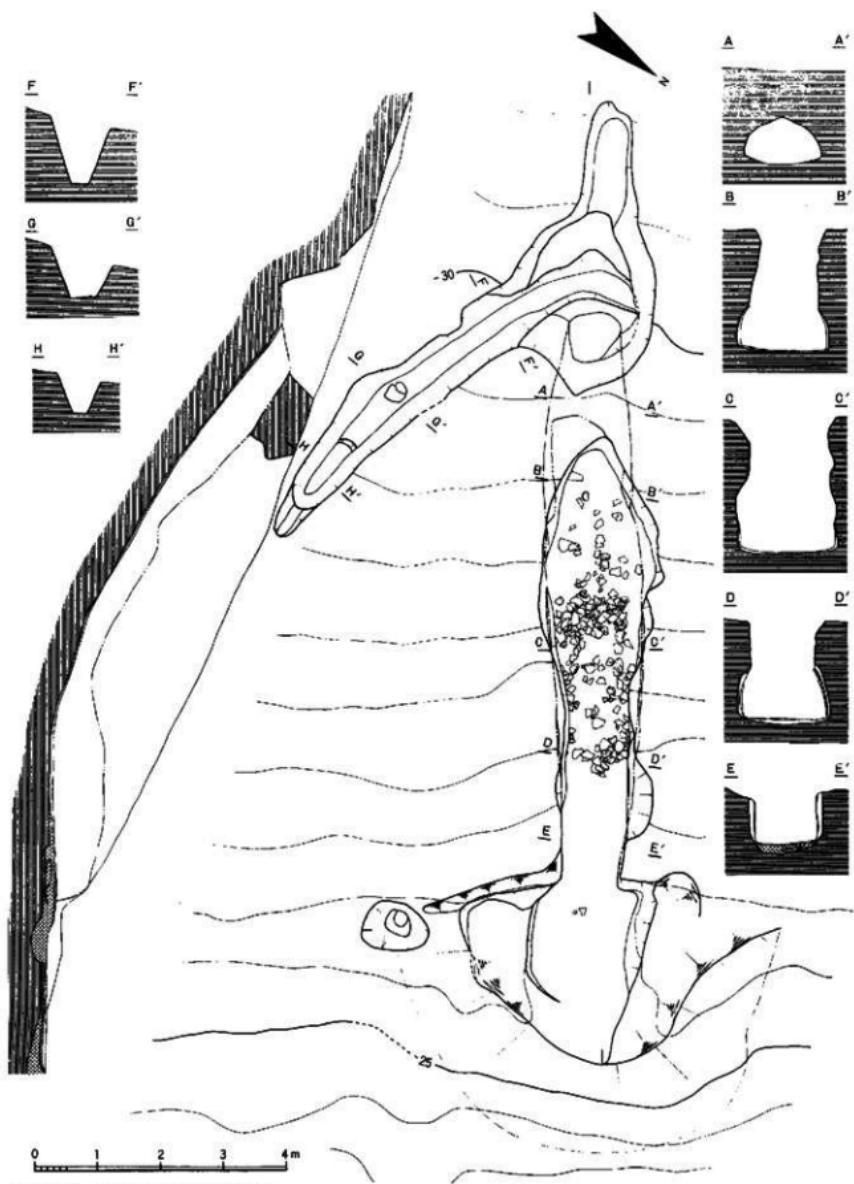
また、壁・床は、掘り抜きのままで、粘土の貼り壁等補修の痕跡はみられない。

出土遺物（第14図1~11）

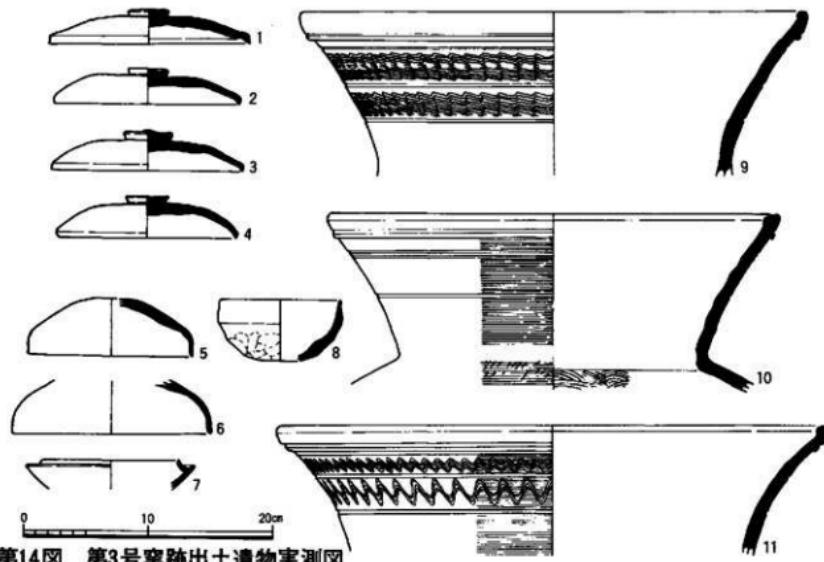
5~8・11は窯体内、1・3・4は前庭部覆土上面、2・9・10は、窯体周辺部からの出土遺物である。蓋5の、口縁部は、下外方に下り、端部は丸い。天井部には、ヘラ削りを施さない。杯身7のたちあがりは、内傾してのび、端部はまるく、受部は上方にのびる。窯体外出土で、本跡に伴なう遺物は、9~11である。蓋2~4は、西蓮沼・長窓跡〔舟崎 1974〕出土遺物に類似し、7世紀後半~8世紀初頭に、1は、第2号窯跡の遺物と考えられる。（池野）



第12図 No.16・17遺跡遺構全体図



第13図 第3号窓跡実測図



第14図 第3号窯跡出土遺物実測図

(5) 奈良時代の造構と遺物

① 第2号窯—I

立地 第2号窯—Iは、谷奥く近くの丘陵南斜面に位置する。

窯体はほぼ等高線に直交し、主軸をN—6°Eに向けて構築されている。

前庭部の標高は、22.5m、煙出し部の標高は27mをそれぞれ測り、窯体の比高は4.5mである。

窯体規模と焼成部 窯体は天井部、煙出し部を失い、窯体上方へむかうほど遺存度が悪い。また、燃焼部・焚口部は、窯体—Iの改修で前庭部となつたため、床面から上方約20cmを除いて他は失われている。

窯体—Iの焼成部は、窯体—Iと重複し、改修後も煙出し、焼成部が再利用されたと考えられる。窯体の全長は約12.2m、最大幅1.2mを測る半地下式の窯で、床面傾斜は焼成部上部で37度、中程で25度前後を有する。

焚口・燃焼部 焚口の幅1.2m、傾斜変換点まで主軸上での延長2.2m、床面傾斜10度を各々測る。焚口に近いたちわりG—G'では、床2枚・左右1枚の青灰層で還元凝固したスナ入り貼壁を数えた。

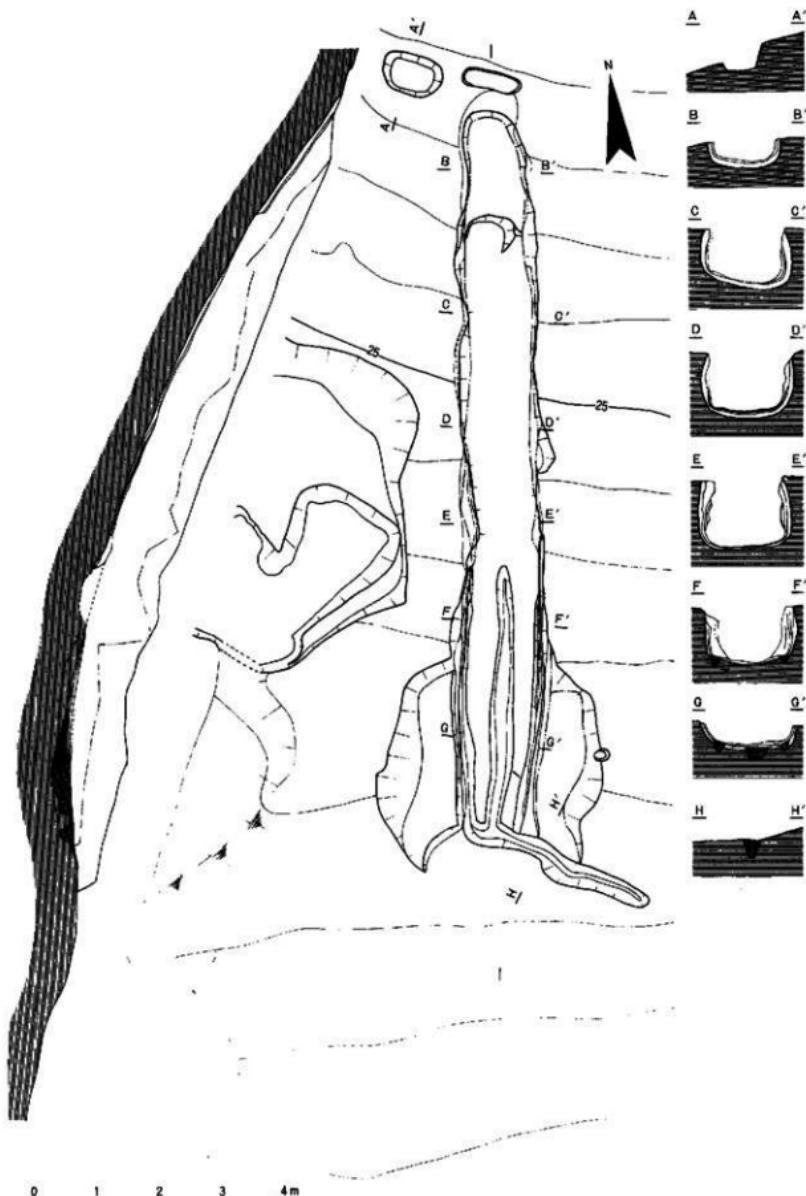
排水施設 焚口・燃焼部の床面下には、平行する3本の溝が設けられ、下部で1本に連結して前庭部の右斜方へ約2m伸びる。酸化層を切って溝を設けていることから、一度窯を焼き上げた後に掘り込んだといえる。

左右の側溝上を、主に大型甕の破片で被覆し、中央の溝中には、10cm前後の大きさの窯壁碎片塊を埋めこむ。

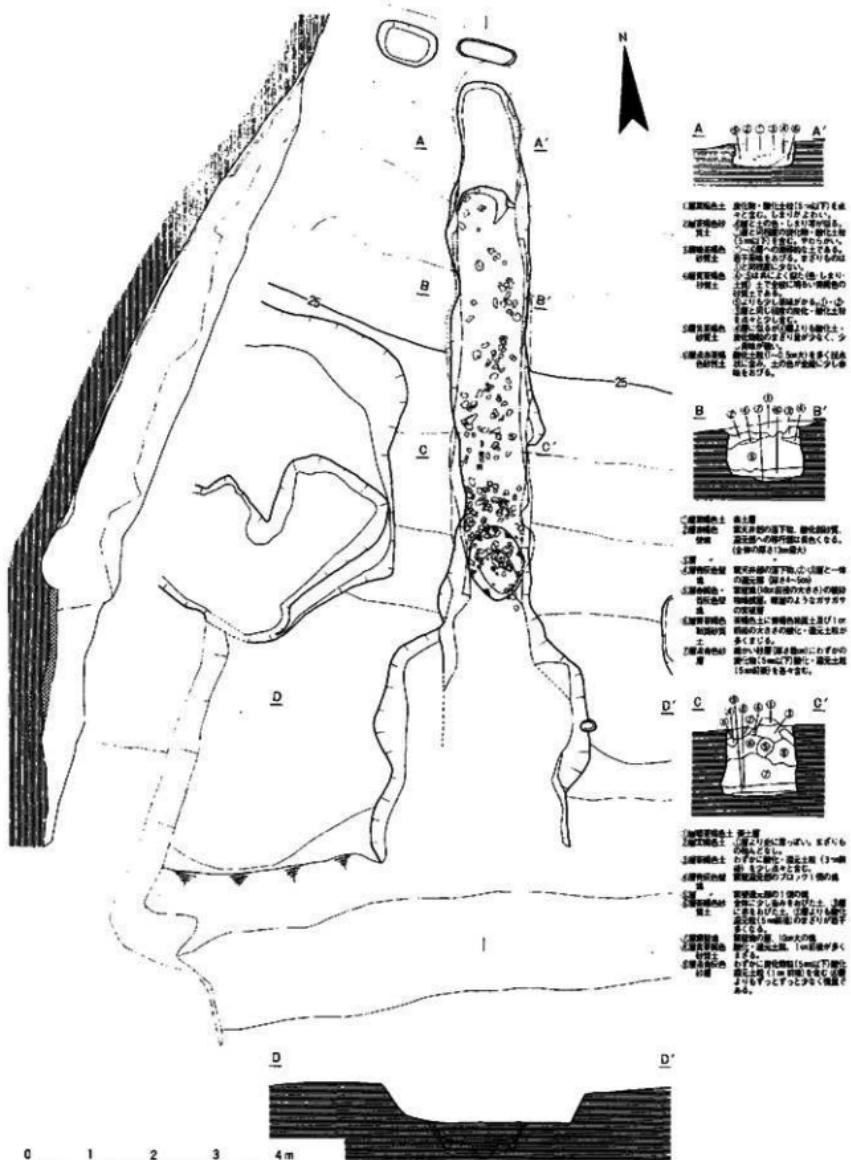
調査中、溝上端部付近の床面下の砂層からは、地下水が少量湧水していたことからも、溝を暗渠にし、排水を目的とする施設と推定できる。

前庭部 溝下端の前方に幅約2.5m、長さ2mの平面が認められ、これが前庭部に相当する。

灰層 窯体—Iに伴う明確な灰層は、土層セクションで観察した。灰層は前庭部の下方1mにおいて横幅約6mあり概方向は、前庭部の下方2.6mまで広がっている。層厚は平均25cmで、地山面に近く地植している。前庭部の左側4m四方にわたって、杯Aの生焼け品が大量に投棄されていた。



第15図 第2号窯—Ⅱ実測図



第16図 第2号窓 - I 実測図

② 第2号窯—I

立地 第2号窯—Iは、第2号窯-IIの窯体を改修した窯である。従って、前記窯と立地は同様である。

前庭部の標高は、第2号窯—Iより約30cm高く22.80mを測り、窯体の比高は4.2mを有する。

窯体規模と焼成部

第2号窯—Iは、先の窯体の焚口・燃焼部を掘削し前庭部に当てる。窯体短縮の目的は、生焼け品の多い事から排水溝だけでは焼成時の窯体内温度の上昇が不充分なため改修により漏水の影響の少ない現有の所まで約2.5m窯体を縮少したためと推定される。なお、窯体の短縮分を焼成部上方へ延長した痕跡は、確認できなかった。

窯体は、全長9.6m、最大幅1.2mの規模をもつ。

また、たちわりD-D'では、床2枚と左右2枚、E-E'では床1枚と左右3枚の青灰層還元凝固のスサ入り貼壁を各々数えた。側壁の補修は、その都度部分的に行なわれており、壁の厚さは一定しない。

焚口部・燃焼部 焚口の幅は0.9m、焚口から傾斜変換点までの延長は2.4mで、中程にいわゆる舟底状ピットがある。また、たちわりF-F'では、窯体の貼壁が最初と最終面で20cmの差をもつ。更に床面では隅丸になるため、横幅を減じ狭くなっている。

舟底状ピット 燃焼部には、長さ1.2m、幅0.9m、深さ0.2mの穴が掘り込まれており、中に炭化物を含有する黒褐色土が充満していた。

穴の底面は漏水を伴う砂層部であり、また第2号窯—Iの暗渠排水は遺存したままの状態におかれ、穴の機能を単に攻めだきの痕跡とみるのは疑問である。

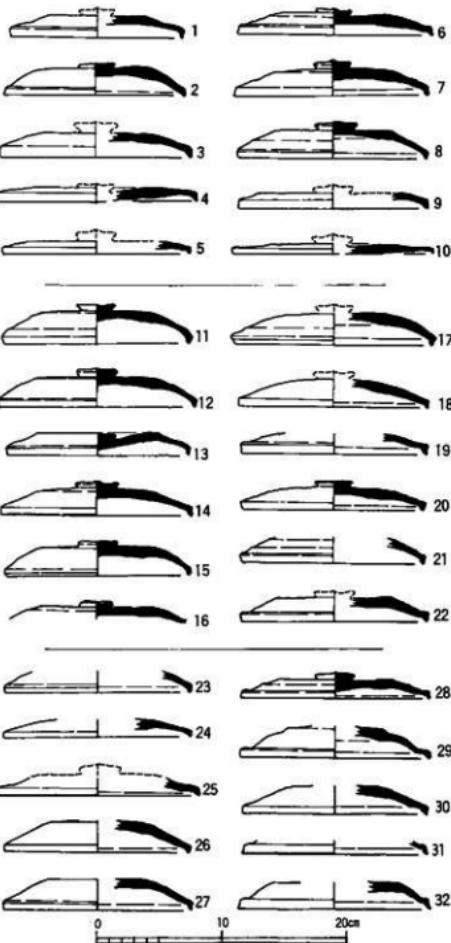
床面遺物 床面には、焼台に転用した半欠損の杯身が多くみられたが、配列等は不明である。なお床面のほぼ全体に砂を薄く敷く。

前庭部 焚口の前方に、地山面を八の字形に掘削した幅2.6m、長さ4.0mの平面を設ける。この中央部には厚さ約10cmの明黄色粘質土を敷き、第2号窯-IIを被蓋している。また、前庭部の両側約4mは、各々勾配のゆるい平面を作っている。

灰層 灰層は前庭部の両側から始まり、丘陵斜面に沿ってみられ、谷底まで連続して存在した。

遺物が最も多量に出上したのは、前庭部周辺で、その厚さは最大0.8m程度を有する。出土量は第2号窯全体で、整理箱に約200箱を数える。

(上野)



第17図 第2号窯体内出土遺物実測図

1~10.排水溝, 11~22.第2号窯-II, 23~32.第2号窯-I

第2号窯体内出土の遺物（第17図）

各器種の須恵器が存在するが、杯蓋を図示する。1~10は、出土状態から第2号窯で最も古いと区別されるものである。天井部はヘラケズリを施し、中央に扁平な宝珠形のつまみをもつ。内面中央部に仕上げナデを行う。

11~22は、第2号窯-Iの床面から出土し、前記の排水溝出土品と形態が似る。また第2号窯-I出土の29・30・32は、口縁端部が下方に長く伸びること、天井部周縁近くの湾曲が大きくなるなどの傾向があり、この点前者と異なる。

灰層の遺物

遺物は多量の須恵器と若干の土師器が出土し、器種（A・B……）、法量（I・II……）により細分できる。^{出典}

杯蓋（第19図1~22） A I (1)は口径13.0cm、器高3.1cmを計る。胎土は細密で、内面中央に仕上げナデを行う。

A II (2~19)は口径14.0~16.0cm、器高1.2~3.2cmを計る。灰色ないし暗灰色をなし、扁平な宝珠形つまみをもつ。天井部はヘラケズリ・ヨコナデを施し、内面中央部に仕上げナデを行う。A III (20)は口径17.5cm、器高2.7cmを計る。A IVは口径18.9cm、器高3.2cmで、ヨコナデした天井部に宝珠つまみがつき、二本組沈線を2箇所に引く。B (22)は口径18.9cmを計り、胎土に細砂粒を含む暗青灰色の須恵器である。天井部はヨコナデし一本組沈線を4箇所に施す。

杯（第20図1~49） A (1~8)は底部に高台のつかない杯で、口径11.7~13.2cm、器高11.7~12.9cmを計る。底部切り離しは、いずれもヘラ切りであり、体部内外面にヨコナデを行う。B (9)は無高台杯で、口縁部が強く外反する。口径11.1cm、器高3.8cmを計る。C (9~49)は底部に高台のつく杯である。C I (10~14)は口径7.8~8.6cm器高3.4~4.5cmを計る。C II (15~27)は口径9.8~11.2cm、器高3.0~4.2cmを計る。C I・C IIは器面の全体にヨコナデを施し、底部と体部外面の境に棱線の入るものが多い。C III (28~38・43)は口径13.2~15.2cm、器高3.5~4.9cmを計り、体部中程に沈線を引く28・38・43がある。また底部はヘラ切り痕を留めるものが多い。C IVは(41・42)は口径14.3~14.7cm、器高5.4~6.2cmを計り、体部に沈線を引く。底部はヘラ切り痕を残すものと、更にヨコナデ調整を加えた二者がある。C V (39)は口径14.8cm、器高10.2cmを計り、体部に沈線を引く。C VI (47~49)は口径17.2cm、器高6.6~7.2cmを計る。48の底部はヘラケズリを施す。C VII (44~46)は口径19.0~19.6cm、器高4.3~6.4cmを計り、体部に沈線を引く45と引かないものがある。45・46の底部はヘラケズリを施す。D (40)は口径13.3cm、器高4.6cmを計る。体部上半は外反し、体部中程に棱をもつ。この体部外面はヨコナデを施し、底部はヘラ切り痕を留める。

壺蓋（第20図1~21） 壺蓋は壺A・B・Cに被るもので、天井部には淡緑色の自然釉が一面に付着する。また天井部中央のつまみは、宝珠形や少し扁平なもの、或いは中くぼみのものがあり、天井部に沈線をめぐらす例がある。口縁端部は三角形に尖るものと角ばるもの及び内反・直立・外反などの変化がある。

口径により、A I (2~11)、口径8.4~12.4cm、A II (12~20)、口径13.2~14.8cm、A III (21)、口径18.2cmに三分される。なお、13は乾燥後に一孔、21は生乾きの段階で三孔を各々外面から内面に向けて穿孔している。

壺（第20図22~第23図20） 壺は体部上半部に淡緑色の自然釉がかかり、底部側の体部下半は全般に3面前後のヘラケズリを施し、他の体部外面はヨコナデ調整する。また底部高台の外方へのふんぱりは強く、高台端面は上下にふくらむなどの変化がみられる。

A I (第21図22~28)は体部最大径が9.2~11.7cmを計り、口頭部・体部上半部に沈線を加えることが多い。A II (第23図1)は体部最大径が16.8cmを計る。A III (第21図30~35・37・38、第23図2~3)は体部最大径が17.8~21.1cmを計る。口頭部は内傾・直立の二者があり、口縁部は角ばるもののが主体を占める。また口頭部・体部の長短差もある。38は沈線で区画した二面の体部上部が平面となる。3・32は被蓋の痕跡がない。

B I (第21図29)は無蓋の壺で、口縁端部は若干ふくらみをもって角ばる。底部はヘラ切り痕を留める。C (第23図4~7)は、B Iと、口頭部・肩部への沈線施文、体部内外面をヨコナデ調整するなどの手法が共通する。なお第23図6の器種は不明であるが、口頭部の形に類似点がみられる。外面に櫛搔波状文を施す。D (第23図8)は口径10.6

cm、器高6.4cmを計り、ヘラ切り痕を残す底部以外は自然釉が付着する。E I (第22図5) は器高13.6cmを計る。底部に別個体の破片が溶着する。E II (第22図1~4・6~17) は器高21.0~25.0cmを計る。II頸部の中程と体部肩の屈曲部に沈線を施す。この屈折部には鋭角5・16と丸みをもつものの両者がみられる。体部と頸部の接合は三段構成をとる(田中 1964)。胎土は堅緻で細粒を若干含む。F I (第23図9) は第31図2と同様な小型品で、口縁端部は断面三角状に隆起させ、F II の受け口状口縁と同形態をとる。F II (第21図36、第23図12~20) は太い口頸部中程と体部肩の屈曲部に沈線を施す。屈曲部はや、鋭角なものと丸みを有する二者がある。14は口頸部内面にカキ目を施す。

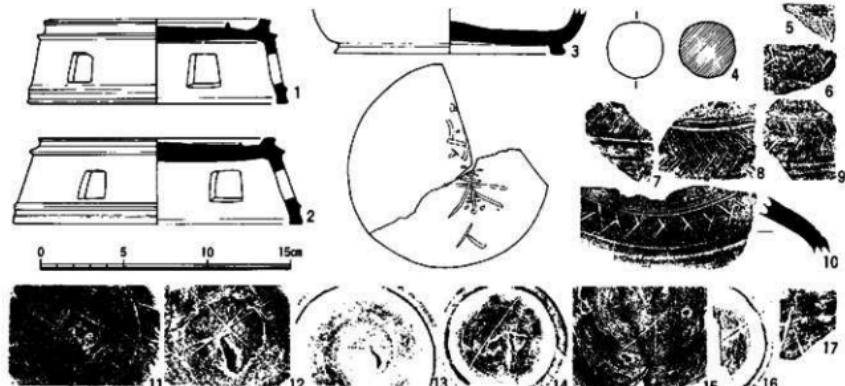
なお第18図5~10は壺体部の屈曲部で、棒状具による施文がある。半径は8が約10cm、7・9・10が13~14cmを計る。この内7は屈曲部下側の破片であり、他はいずれも体部の上胴片にあたる。

平瓶(第23図22~24) I (22・23) は体部最大径が12.5~13.1cm、口径4.9cmを計る。体部内面をヨコナデ後、約5cmの円板で体部上面をふさぐ。提梁は付かない。II (24) は体部最大径が23.7cm、口径7.0cmを計り、体部内外面にヨコナデを施す。体部上面の閉塞用の粘土円板は、痕跡から約16cmを行っていたことになる。底部は生焼けとなる。

横瓶(第24図1~3) 横瓶は法量差を見るが、図示したのは同法量のものだけである。口頸部は外反して短く、口縁端部は中くぼみで角ばる。体部外面は平行格子状タタキ目文を、内面に同心円文を残しその上にカキ目調整を行う。体部の一側面に残る閉塞用の粘土円板は、直徑約7cm大である。

鉢(第24図5、第26図3~5・7) A (第24図5) は鉄鉢形土器であり、口径27.4cmを計る。ヘラケズリを施した底部は丸みをもち、体部内面中央部は乱方向の仕上げナデを行い、他はヨコナデを施してある。暗灰色をなし、胎土は堅緻で細粒を含む。B (第26図4・5・7) はすり鉢形土器で、B I (5) は口径16.4cmを計り、複合口縁をもつ淡黄灰色の生焼け品である。体部上半はカキ目を施す。B II (4・7) は口径20.2cm、器高13.3cmを計り、体部内外面はヨコナデを施す。底部は、棒状具で刺突したくぼみを一面にもつ。C (第26図3) は口径46cm、器高25cmを計り全体の光沢を残す淡黄灰色の生焼け品である。体部外面は格子状タタキ目文の上にカキ目調整を行う。体部・底部の内面は同心円文のあと具痕跡を留める。

盤(第24図6・7) A (6) は口径36.2cm、器高13.6cmを計る。体部外面はタタキ調整後、ヨコナデを施し、タタキ目をすり消す。体部中央には沈線を加え、下半にヘラケズリを行う。底部・体部内面はヨコナデを施す。B (7) は口径13.2cm、器高約10cmを計り、形が少し歪む。体部上半はカキ目を施し、体部下部はヘラケズリを行い、口辺部の屈曲や形状及び体部の調整が施す手法と一部共通する。体部には対面に三角形把手をつける。



第18図 第2号黒灰層出土遺物実測図

壺（第24図4・8～11） 壺の調整は口頭部にヨコナデ、体部上半にカキ目、底部にヘラケズリを施す。内面は口辺部にヨコナデまたはカキ目を、体部にヨコナデ・カキ目・刷毛目を各々施すことが多い。口径はI（8）が21.2cmを、II（9～11）が29.3～33.6cmを、III（4）が38.2cmを各々計る。4は土師器である。

壺（第25図1～10・第26図1・2） A（第26図1・2）は口径50.0～56.0cmを計る。口縁端部は上下に肥厚し、外面に櫛模波状文を2条めぐらす。B～Fは体部外面に平行・格子状タタキ目文がカキ目調整の先に施され、体部内面に同心円文のあて具痕を留める例が多い。B I（第25図4・7・8）は口径17.4～18.2cmを、B II（第25図6）は口径23.6cmを、B III（第25図5）は口径26.2cmを各々計る。C I（第25図9）は口縁端部が上方にのび断面三角形となる。D（第25図3）は体部内面にカキ目を施し、外面に把手を付ける。E（第25図1）は口縁端部が若干肥厚し、頭部・体部に沈線を入れる。F（第25図2）はぼく直立する口頭部に沈線を入れ、体部上半に環状把手をカキ目調整後貼付する。この把手の貼付手法は他の例と同様である。また第25図10は大壺の把手部分で、格子状沈線を施す。

硯（第18図1・2） 圏足（円面）硯は硯部と台部を連続して成形する。硯部の陸と海は同一器面上に一条の突縁を設け区別する。台部はぼく正方形の透し孔5個を各々あける。

土管（第26図6・10） 土管は須恵器・土師器があり、一端に接合用の差込み部（口径14.0cm）を設け、その全長は不明である。体部はタタキ調整後差込み部側にカキ目を施す。類例は奈良県平城京跡〔町田 1974〕で知られる。

円板（第26図9） 9は直径27.2cmを計る。一面にナデ、他面に指痕痕跡を全般に留める。用途は不明である。

靄道具（第20図50～64） 口径により細分できる。いずれも口縁端部は薄く尖り、体部器厚の凹凸が目立つ、底部はヘラ切り痕を留める。また体部外面の口縁部よりに壺底部の高台の付着したものや59の別個体の溶着例がある。

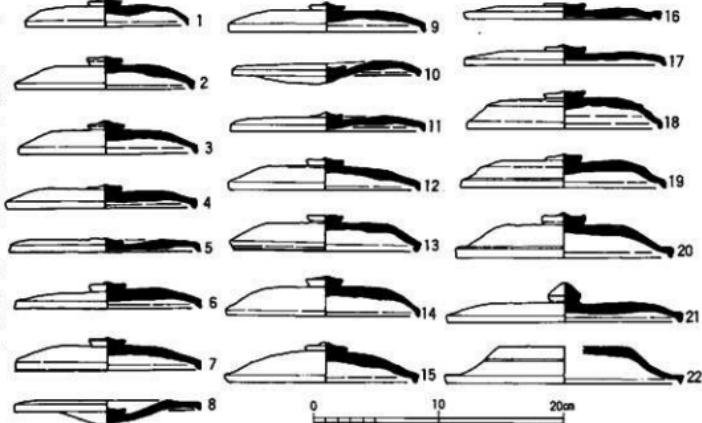
ヘラ書き文字（第18図3） 杯は口径17.0cm、器高6.3cmを計り、体部外面の中程に2条の沈線をめぐらす杯C VIに該当する。文字はこの杯のヨコナデ調整した底部外面にヘラ書きしたもので、筆順は違うが「□□秦人」と記入される。^{註②}

ヘラ書き記号（第18図11～17） 記号は壺の底面、杯の底部内外面・杯蓋の内面にみられ、簡単な記号の「-」「×」「*」「イ」「ト」「大」を用いる。この内比較的多いのは「-」「×」である。

この外には、構の羽口（第26図1）や土師質の土玉（第18図4・約35g）及び盤または高杯の脚（第23図11）がある。

重ね焼き 現在約25例ある。同種の杯の2段重ねでは杯A15例、杯C 2例、3段重ねでは杯A 4例、杯B 2例を各々数える。他に蓋Aの2段重ね、杯Aと蓋Aの組み合せ、杯Cと蓋Aの各1例の重ね焼きがみられる。（上野）

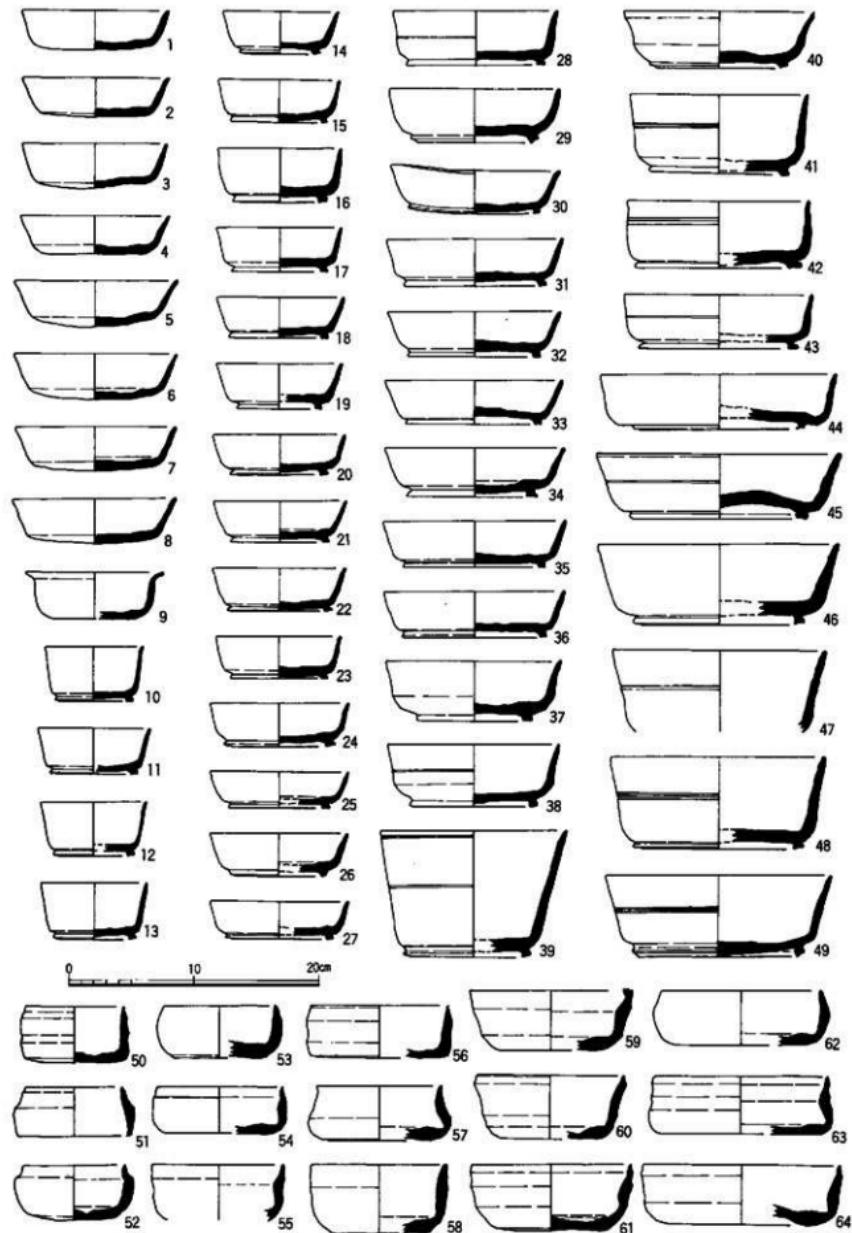
註① 第2号窯出土の



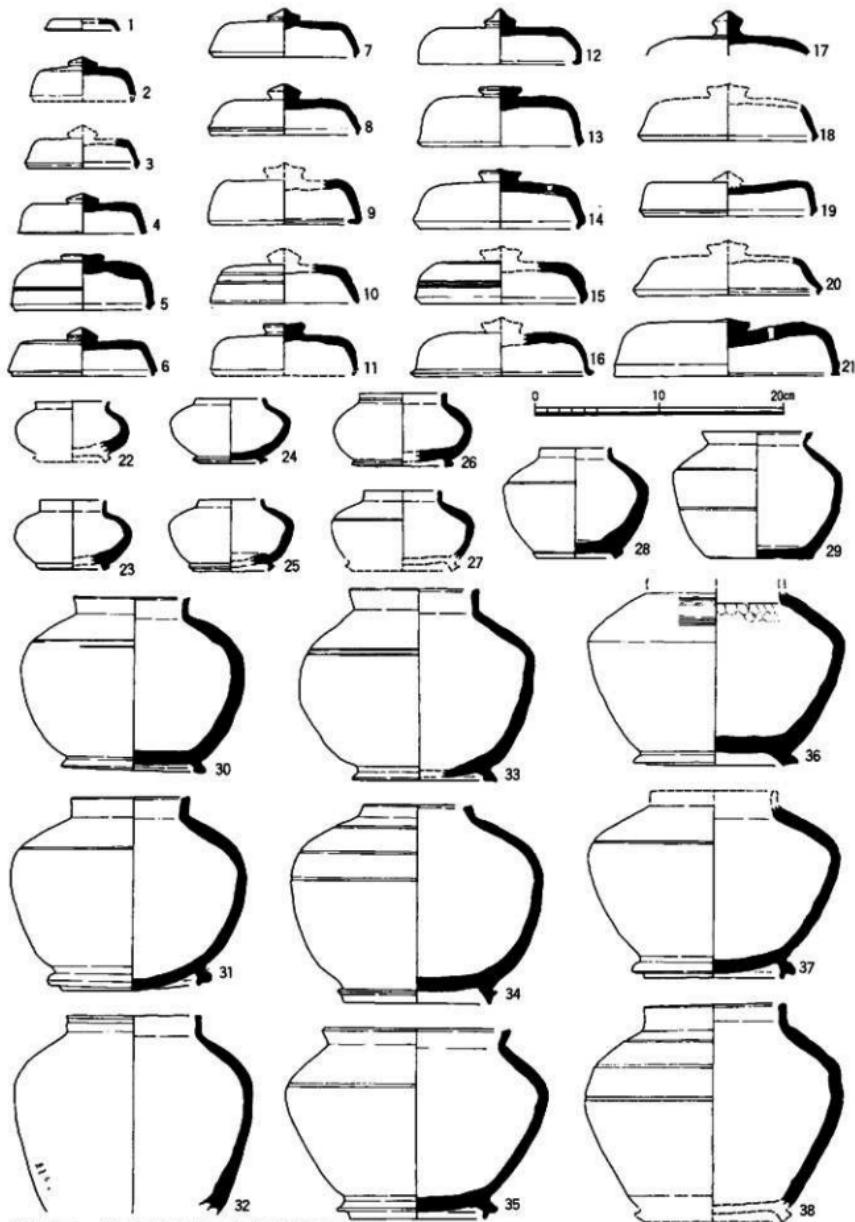
遺物量は多く、約1カ月余りの復元・実測作業では充分整理できなかった。このため全器種の網羅及び法量差の揃出は困難であり、こゝでの分類は便宜的なものである。

註② 文字の筆順・解釈は宮田達一氏の教示による。なお図版完成後、杯の体部片1点が接合したが、図示できなかつた。

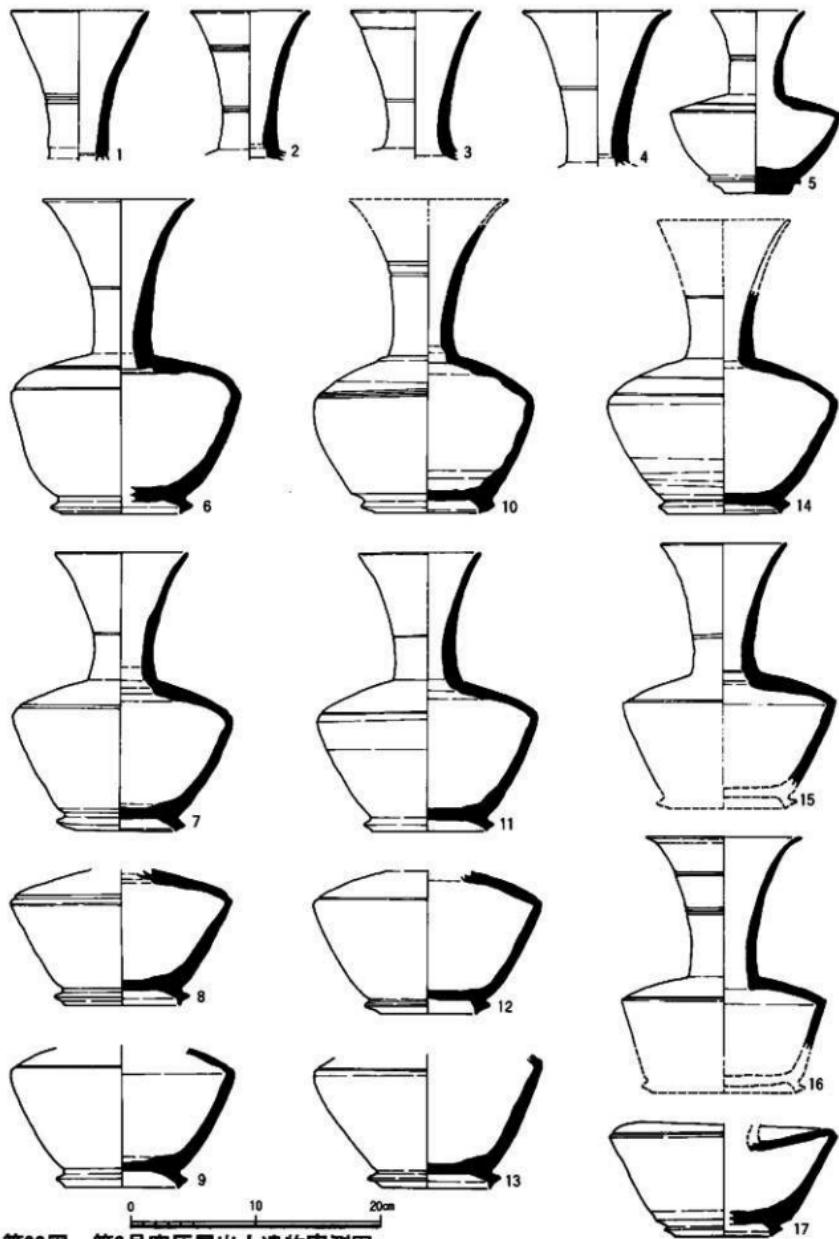
第19図 第2号窯灰層出土遺物実測図



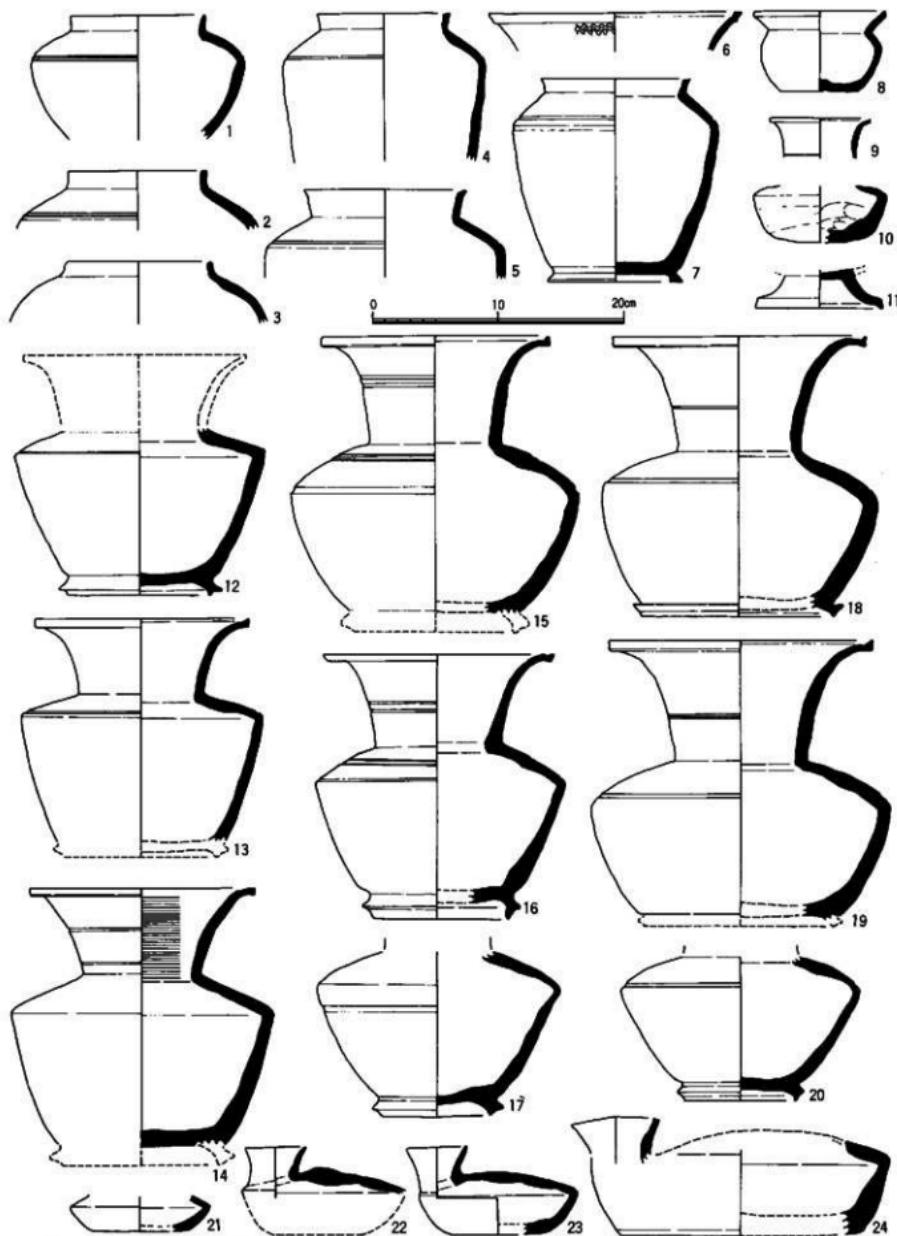
第20図 第2号窯灰層出土遺物実測図



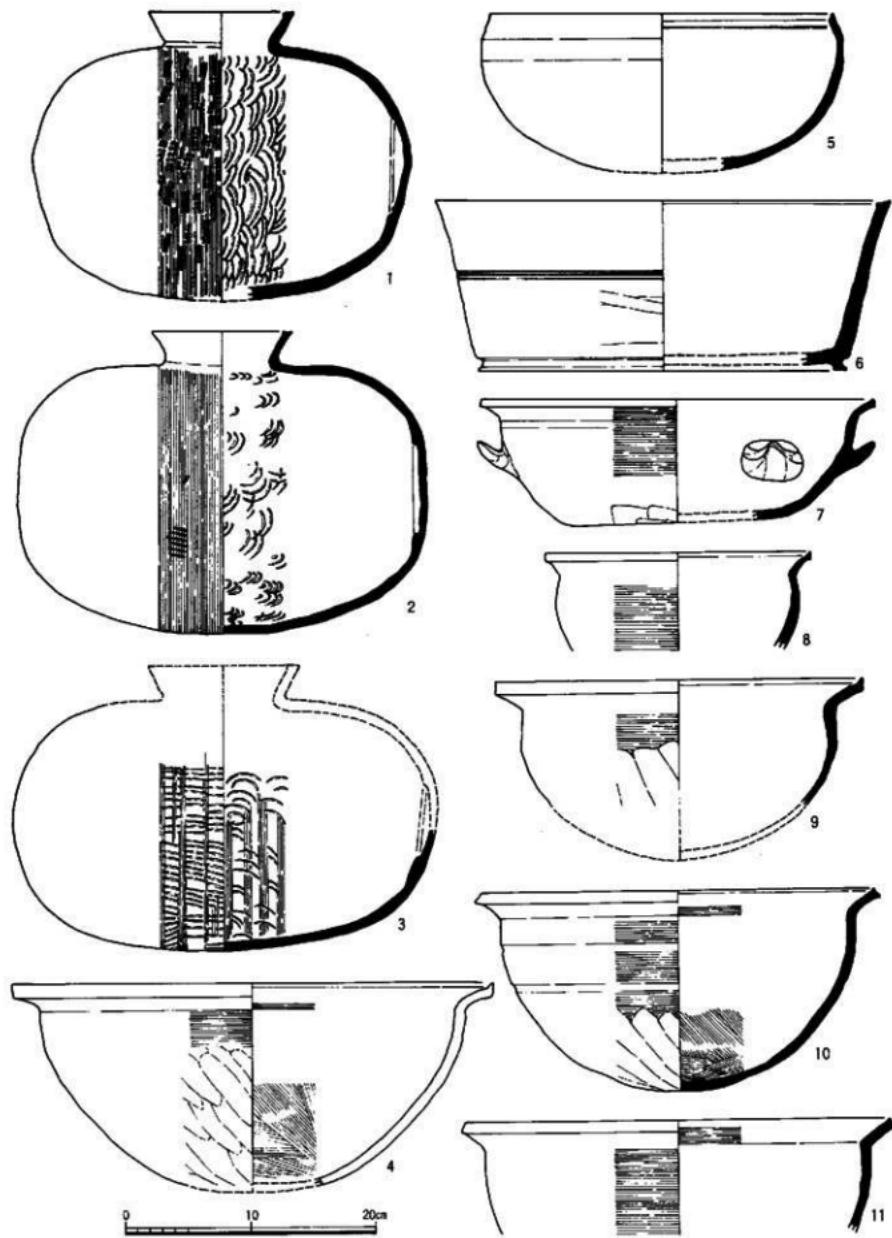
第21図 第2号窯灰層出土遺物実測図



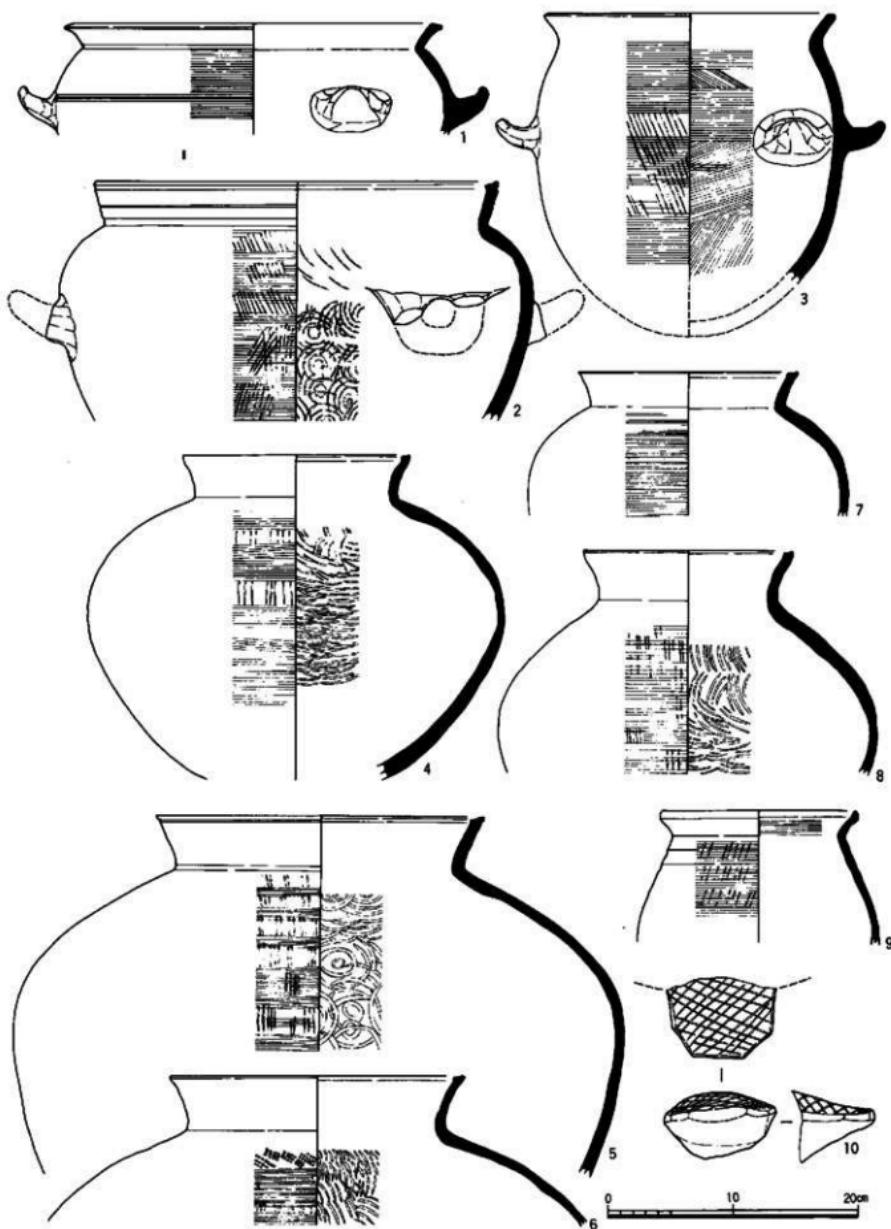
第22図 第2号窯灰層出土遺物実測図



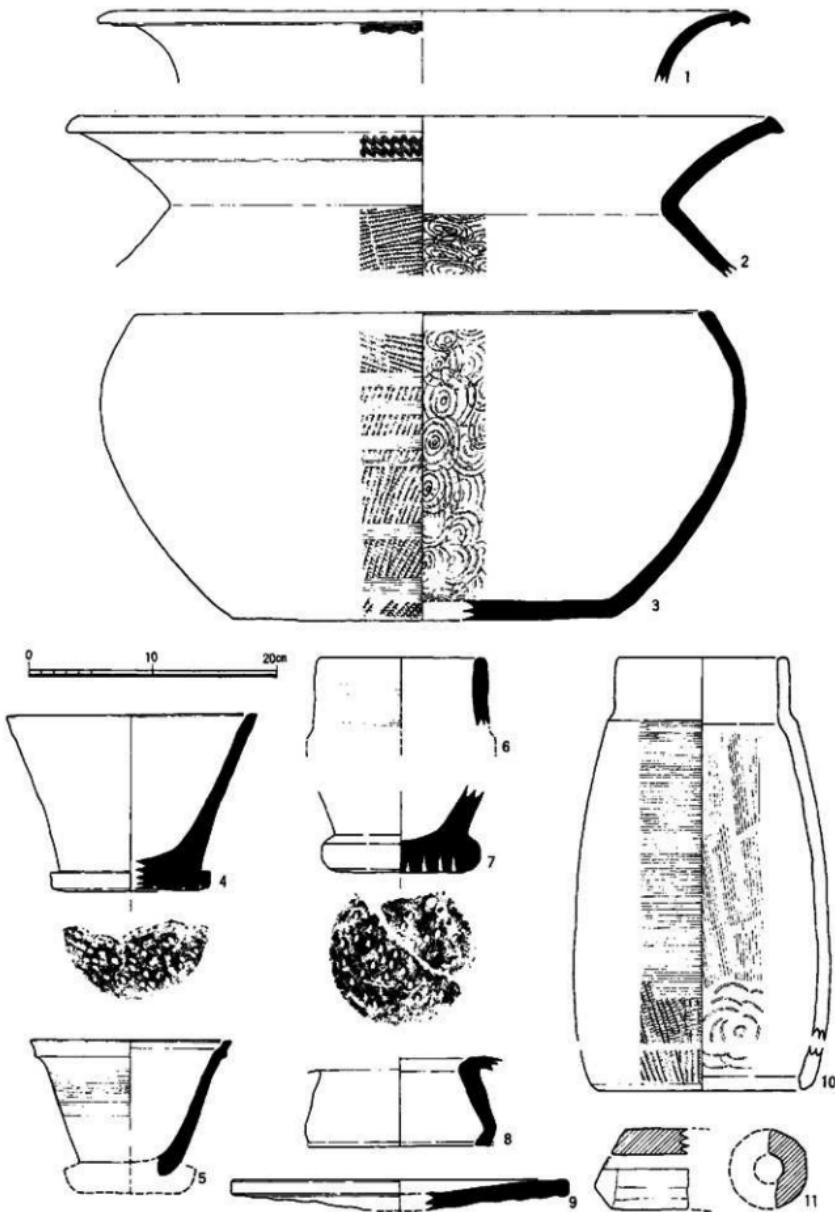
第23図 第2号窯灰層出土遺物実測図



第24図 第2号窯灰層出土遺物実測図



第25図 第2号窯灰層出土遺物実測図



第26図 第2号窯灰層出土遺物実測図

③ 第2号住居跡（第27図）

第2号住居跡は、第2号窯跡の南東方向約10mの斜面上に位置し、標高20~21mをはかる。住居跡は斜面上のため、南壁の立ちあがりは確認できない。主軸は、N-75°-Wにある。

平面形態は、東西にやや長い方形と推定され、完存する北壁の全長は3.8mである。周壁溝はみられず、床は平坦で、南側半分は黒褐色土層中に貼り床が施される。

主柱穴は、住居跡中央部に位置する穴（P）1個と考えられる。

カマドは、全長1.8m、最大幅1.4mで東壁北端に作られており、床面上に築かれる。袖は、茶黒色粘質土、黄褐色粘質土で構築され、カマド断面図の④層下部は火床にあたる。煙道部は、幅30cm、長さ60cmで住居跡外に出る。

出土遺物（第27図1~7）

1~5は、住居跡覆土層、2~4・6~7は、カマド周辺、3は、床面直上から出土した。覆土層中からは、かなりの量の窯壁塊が出土している。

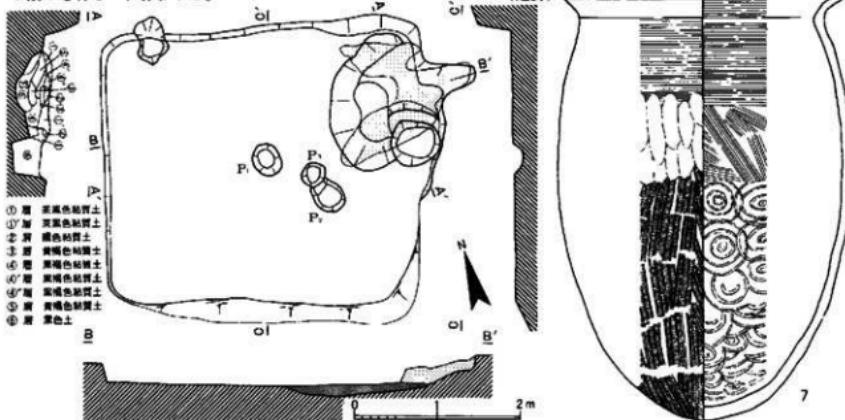
蓋1は、天井部がやや丸みをもち、屈曲して端部にいたる。端部高は、低く、内傾し、断面は三角形に近い。天井部にはヘラ削りが施される。

杯2は、ざんぐりした高台に、体部で屈曲し、外傾する口縁をもつ2~3と、なめらかに立ちあがる4がある。高台が付く底面端部には、ヘラ削り、横ナデを施す。2~4は生焼けである。

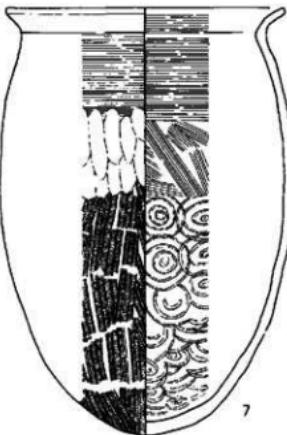
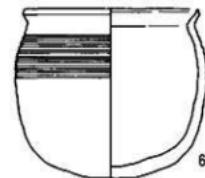
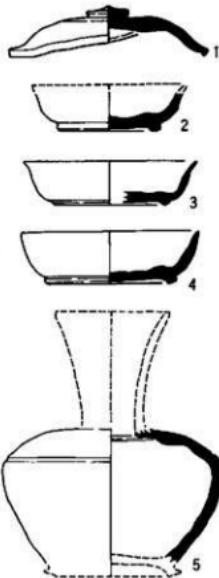
長頸壺破片5は、生焼けで肩に一条の沈線を施す。

小形の甕6は、頸部基部で「く」の字状に外傾し、口縁端部で直立する。胴部上半部まで粘土巻きあげによって作られ、その上はロクロ成形する。胴部上半部には、沈線状のカキ目、内面には横ナデ調整、底部内面には横方向の削りを施す。大形の甕7は、頸部基部で「く」の字状に外傾し、端部は丸くおさめる。胴下半部外面上には、タタキ目、円形アテ具痕が残る。上半部にはカキ目を施した後、上下方向のヘラ削りを行ない、赤彩する。

(池野)



第27図 第2号住居跡・出土遺物実測図



④ 第1号段状遺構（第28図）

第1号段状遺構は、第2号窓跡とは小谷を挟んだ東斜面上に位置し、標高は20.5~21.5mをかる。主軸は、N-28°Wにとる。

遺構は、等高線にそってほぼ直線的に掘られており、全長11.7m、幅1.8mのテラスを作る。壁の立ちあがりにそって部分的に溝が掘り込まれ、テラス面には、頗るに掘り込まれたピットがみられる。類例は昨年調査したNo20遺跡〔池野他 1979〕に求められる。遺物には、須恵器・土師器があり、溝、ピット内から多く出土した。

出土遺物（第28図2~8）

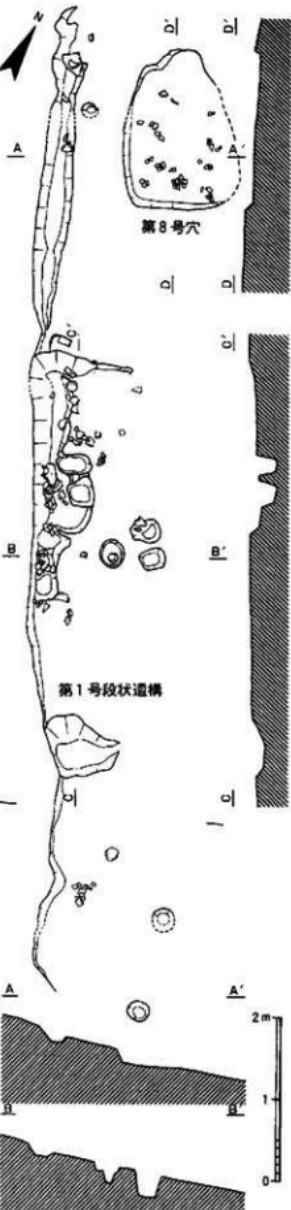
蓋2~3は、偏平なつまみが付き、器高が低い半な天井部から、なめらかに内傾し、尖り気味の端部に至る。

杯4~7は、底面は丸味をもち、体部が直線的に外傾する4~5体部で屈曲して外傾する6~7がある。

横瓶8は、丸味をもった肩部から屈折して口縁部に達し、直線的に外傾した口縁部をもつ、端部はやや盛り出し、内傾する。肩部形成は、ロクロでひいたあとタタキを施し、外面は横方向、内面には上下方向のカキ目調整を施し、粘土板をもって孔をふさぐ。

⑤ 第8号穴（第28図）

第8号穴は、第1号段状遺構北端東側に構築される。平面形態は、長径1.9m、短径1.3mのタマゴ形を示す。底面は、平坦で土師器・須恵器が散きつめら



第28図 第1号段状遺構出土遺物実測図

1.第1号穴、2~8.第1号段状遺構

れ、その上に焼土層が見られる。西・南壁は、焼土層化する。

⑥ 第1号穴（第29図）

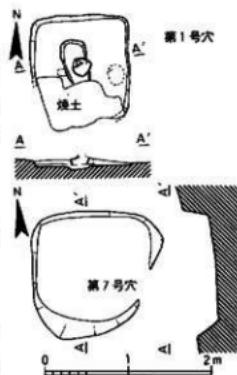
第1号穴は、No16遺跡調査区北西端に位置する。長軸は、N-2°-Wにある。抜根により、南側半分は、破壊されているが、平面形態は、長径1.3m、短径1.2mの方形である。底面は、平坦で部分的に焼土塊が残る。中央部は、さらに数cm掘り込まれ、その上に短頸壺が置かれていた。

出土遺物（第28図1）

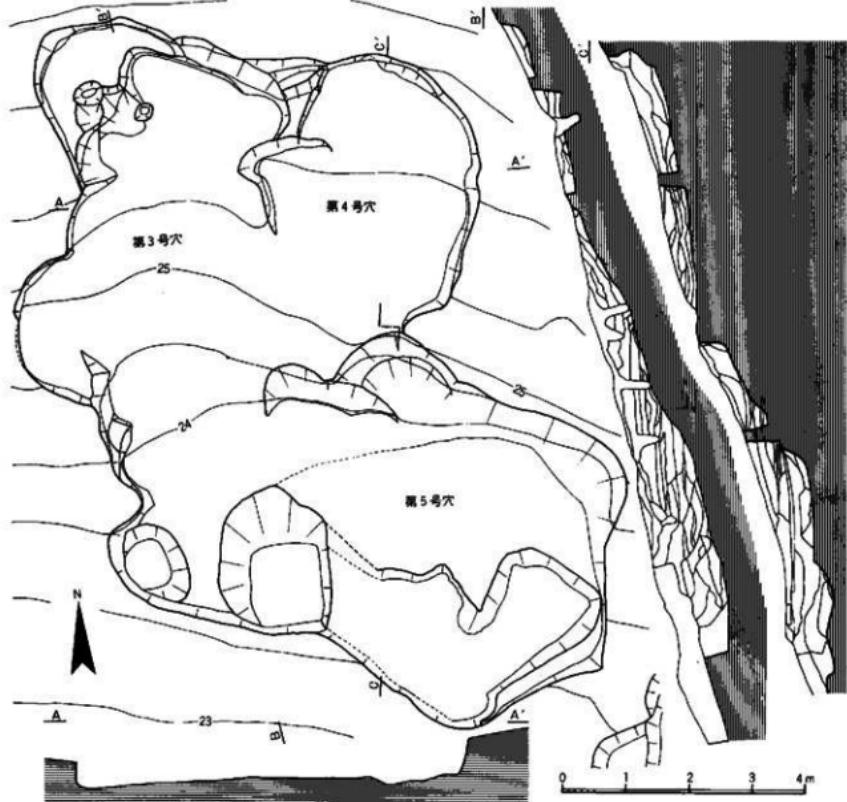
短頸壺1の、口頸部は内傾気味に立ちあがり、端部は内傾する。胴部は丸味をもって底部に至る。下半部の調整は、タタキの後、横ナデを施す。

⑦ 第7号穴（第29図）

第7号穴は、第2号窯跡の東隣に位置し、長軸は、N-5°-Eにある。平面形態は、1.5mの方形である。底面は傾斜にそって傾むき、壁とともに熱を受けた痕跡を残す。覆土層には、第2号窯跡の遺物が多数入り込み、物原状を呈する。（池野）



第29図 遺構実測図



第30図 遺構実測図

(8) 第3・4・5号穴 (第30図)

第3・4・5号穴は、第2号窓路の西側に位置し、標高は、23~27mをはかる。

第3・4号穴は、第5号穴の北側に位置して連なる。規模は、東西8m、南北6.5mで、底面はやや傾斜をもつ。

第5号穴の規模は、東西8m、南北6mの不整形な穴で、底面の起伏が激しい。覆土層には、黄褐色土、茶褐色土上層による平坦面の重なりがみられる (第30図断面)。

平坦面は、穴全体に同一レベルで広がるものではなく、複雑に重なり合う。また、第5号穴から第3・4号穴へ掘り登ったことが理解でき、用途としては、採土を考えられる。そして、穴の底面は、大部分砂層中にあり、採土した土量が多くなく、窓壁等の補修に使用したものと考えている。同様の性格を持った穴としては、第2号穴がある。

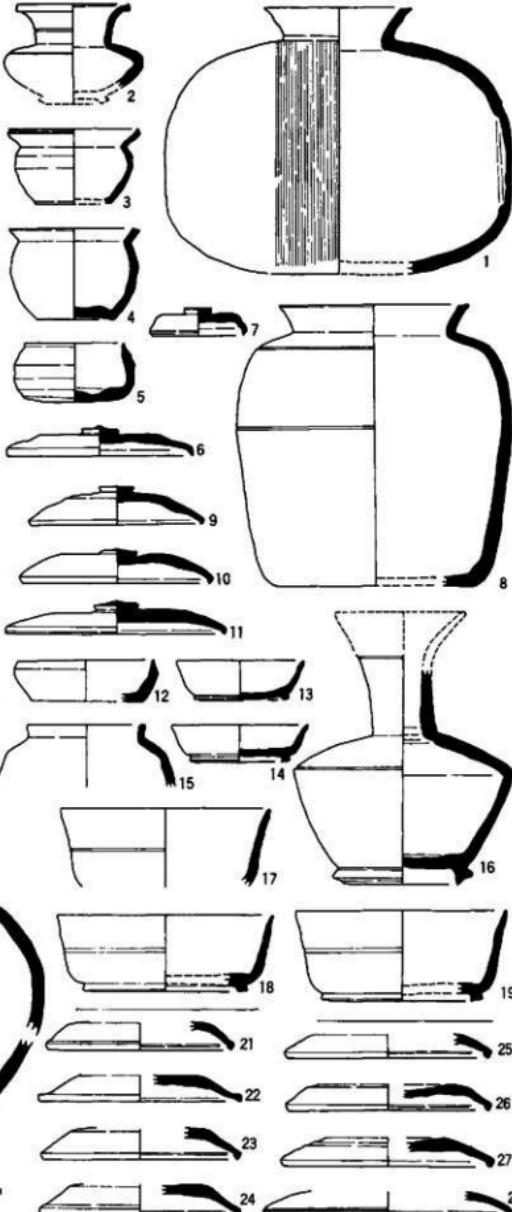
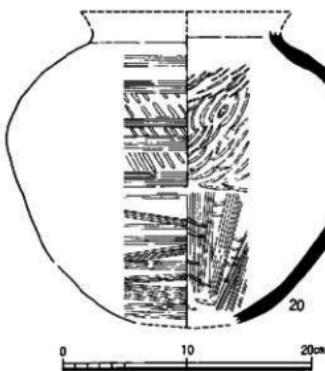
出土遺物 (第31図1~19)

1は、第3号穴、2~8・12は第4号穴
9~11・13~19は第5号穴から出土した。

また、第5号穴覆土上面には灰層がのびる。

造構外の遺物 (第31図20~28)

20~28は、造跡調査区の北東側にあたる谷部を中心に出土した。当遺跡内で最も新しい時期に属する遺物である。(池野)



第31図 第3・4・5号穴、造構外出土遺物実測図

1.第3号穴、2~8・12.第4号穴、
9~11・13~19.第5号穴、20~28.造構外

4 №17遺跡

(1) 調査の経緯

№17遺跡第1号墳は、分布調査の際、古墳の可能性が指摘されていた。試掘調査の折、再度現地踏査したところ、墳丘西側が尾根切断され、南側に周溝をめぐらすことが確認された。伐採後、外形測量を実施し、全面調査に入った。

(2) 立地（第11・12図）

標高約33.8mの東にのびる狭い丘陵尾根が、一段低い丘陵尾根に分岐する基部で、尾根端部に位置する。東方約300mの谷を挟んだ丘陵尾根上には、五歩一古墳群がある。本尾根上には、他に古墳は確認できず単独で一基存在する。

墳丘上からは、南方、現在の宿屋集落方向が展望できる。

(3) 第1号墳（第35図）

墳丘の現状は、竹、雜木林で、東側の一部に崩れがみられる他は、ほぼ旧状を保つ。封土の規模は、東西断面上で15m、南北断面上で14.9mをはかる。墳丘の規模は、地山層整形により、東西30m、南北26mに広がる。裾部から墳頂部へは、約15~20度の傾斜をもって直線的に登る。墳頂部は、約10mの範囲ではほぼ平坦な面が作られる。封土の高さは、1.4mをはかり、旧表土面上に水平あるいは中央部に傾斜をもたせながら直接盛られ、周辺部の削平及び整形によって成る（第12図）。封土下部は、茶褐色土、黒褐色土のブロックの割合が多いが、上面には、明黄褐色土、黃褐色土を主体としたまぎりの少ない土がみられた。

墳丘外に立ちあがりをもった周溝底面の高さは、西側が60m高く、南・東側はほぼ同一レベルで、墳頂部までの高さは2.9mをはかる。

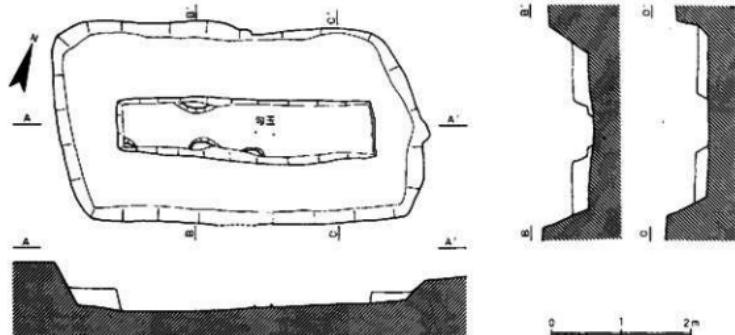
埋葬施設（第32図）

埋葬施設は、墳丘中央部で、木棺を直葬した土塚が検出された。土塚の長軸はN-70-Eにとっている。土塚の形態は、形のくずれた長方形を呈する。上面中央部で全長5.3m、中央部幅で2.9m、底面では4.9m、2.4mをはかる。掘り込みの深さは、北壁45~55cm、西壁55cm、南壁55~65cm、東壁30cmをはかり、なだらかに傾斜して掘り込まれる。

木棺は、土塚の中央部に安置された組合せ木棺と考えられる。長さ3.7m、幅は東側で82cm、中央部で90cm、西側では73cmをはかり東側がやや広く、中央部がふくらむ形で木棺痕跡を検出した。底面は、東に高く西に低いため、中央部から西側に粘土塊を部分的に埋め込み、棺を水平に安置したものと考えられる。

出土遺物（第33図1・2）

木棺の中央部からやや東側に寄った位置で蛇紋岩製の小形勾玉2個が出土した。1は、白灰色で「C」字形を呈し、全体に丸みをもつ。全長1.9cmで、穿孔途中で中断し、反対方向からの穿孔で貫通する。尾部は頭部に比べわざかに



第32図 第1号墳埋葬施設

細くなる。2は、全長1.7cmの方向からの穿孔である。

(4) 第1号木棺墓 (第34図)

第1号木棺墓は、第1号墳の南西方向に約4mの尾根頂部に近い南側斜面上に位置する。長軸は、N-50-Wにあり、傾斜面とは平行せず、約45度ずれる。墳丘や外部施設は、検出されなかった。土塚は、長方形の箱形木棺墓と考えられ、全長2.52m、中央部幅1.42mをはかる。壁際には、幅28-35cmの溝が全周し、木口部は一段深く掘り込まれ、棺床からの深さは24cmである。

出土遺物 (第34図1)

北壁際から刀子1本が出土した。刀子は刃先を欠くが、刃部現存長7.6cm、平棟で厚さ0.4cm、刃幅1.5cmで、茎部との間に鉢金具が付く。鉢金具は、長径1.7cm、短径1cm、幅1.2cmである。茎の長さ6.5cm、厚さ0.4cmで、断面は逆台形を呈し、木質把の痕跡を残す。

(5) 第1号穴 (第35図)

第1号穴は、古墳周溝から2.5m南側に位置する。平面形態は、直径1.2mの円形で、深さ28cmをはかる。底面は、ほぼ平坦で、壁とともに焼土層化し、強い熱を受けた痕跡を残す。出土遺物は無い。

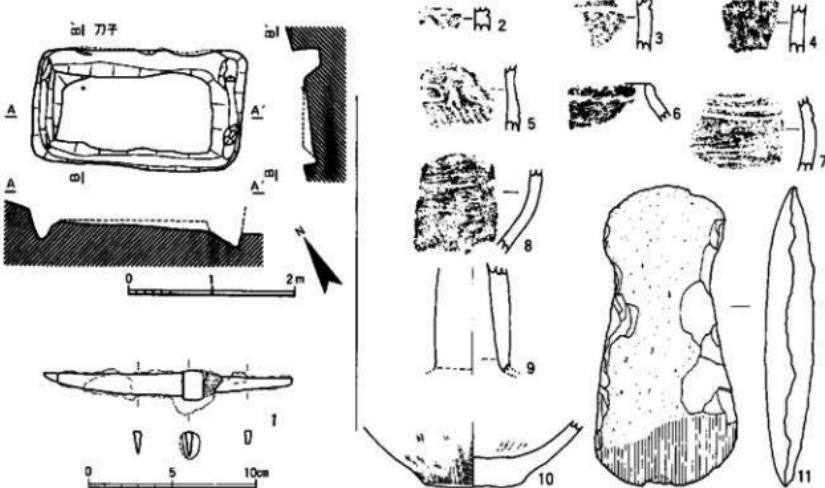
(6) 第3号穴 (第35図)

第3号穴は、墳丘西斜面上の地山層上に位置する。平面形態は、直径1.3mの円形で、深さ32cmをはかる。底面は、ほぼ平坦で、焼土層が堆積する。出土遺物は無い。穴の焼土、炭化物が墳丘に密着して流れ出しており、穴の時期は古墳と同時期もしくは古いと推定され、祭祀に関連する可能性がある。

(7) 封土等出土遺物 (第34図2-11)

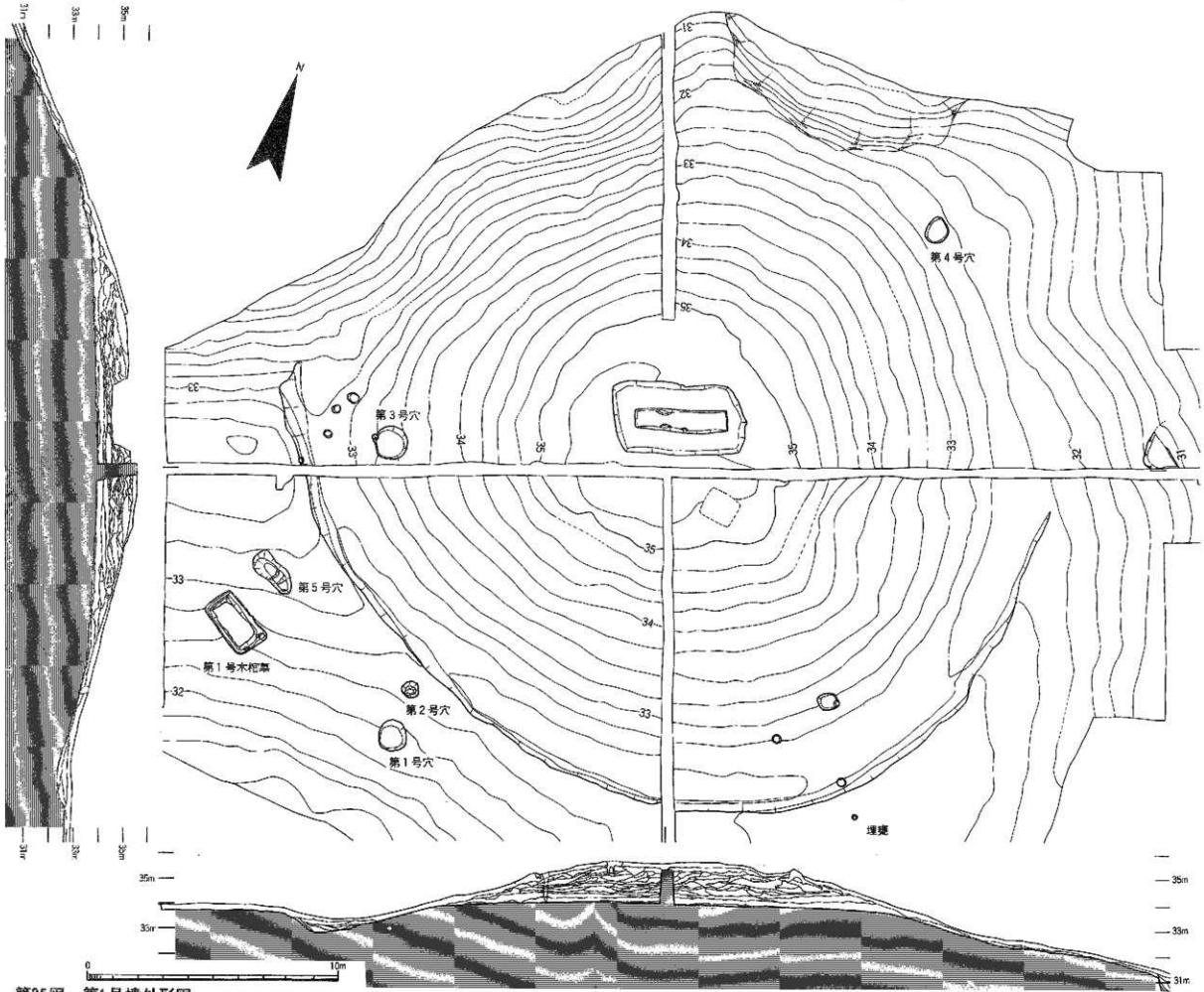
2-4は、古墳東側のドーナツ覆土層出土。4は、木目状然糸で縄文時代中期初頭。墳丘下からは、5-8・11、他に石皿、磨り石が出土し、後期後半に属する。縄文時代の遺構としては埋甕がある。9-10は、封土層中から出土した。9は、高杯脚部、10は、壺の底部破片で弥生時代後期末に属する。

(池野)



第34図 第1号木棺墓・封土等出土遺物実測図

1.第1号木棺墓・2-4.ドーナツ状造構・
5-8-11.封土下・9-10.封土中



第35図 第1号墳外形図

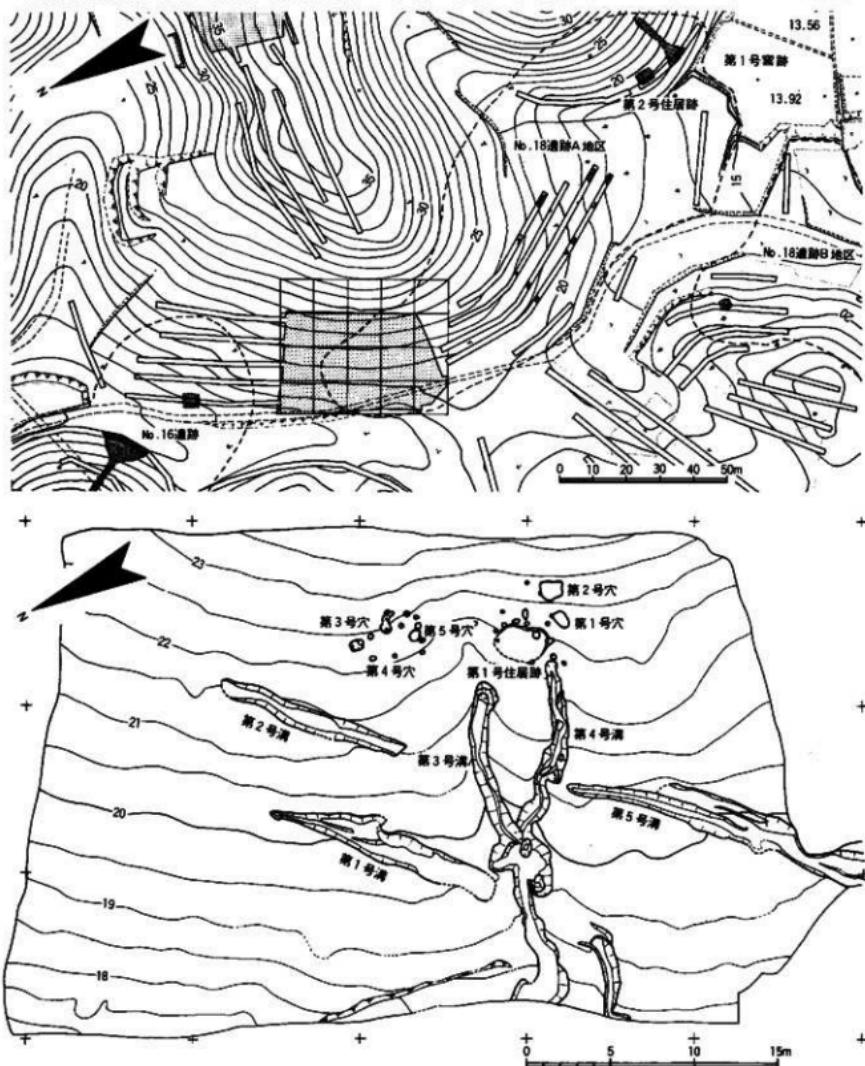
5 No.18遺跡A地区

(1) 調査の経緯

No.18遺跡A地区は、西にのびる丘陵尾根の西、南斜面裾部に位置し、住居跡、穴、溝等の遺構が、小谷を挟んだ西斜面上からは、須恵器窯跡、住居跡が確認された。北側には、No.16遺跡が隣接し、遺跡の性格は似る。

調査は、道路敷に含まれる遺跡の北側縁辺部のみを対象に実施した。標高は、19~25mをはかる。

(池野)



第36図 No.18遺跡A地区の区割図及び遺構全体図

(2) 第1号住居跡 (第37図)

第1号住居跡は、西斜面上に位置し、標高22.5~23mをはかる。平面形態は、等高線上に長い長方形を呈し、長軸をN=32°Eにとる。西壁は、斜面のため確認できなかった。住居跡の規模は、長径3.8m、短径2.2mである。周壁溝はみられず、床面は平坦で、西側は黒褐色土層中に貼り床が施される。

主柱穴は、住居跡内ではなく、外周のピットがそれにあたると推定される。 P_1 ・ P_2 は、意識的に埋められている。

カマドは、全長1.1m、最大幅1mで北壁に作られる。黄褐色土・黒褐色土で構築されるが、全体に西側に流れ出、遺存状態は悪い。

出土遺物 (第37図 1・3・4・7・9~13)

蓋1は、天井部で丸みをもち、わずかに屈曲して端部に至る。端部断面は、三角形に近い1と、長方形に近い3がある。天井部には、ヘラ削りが施される。

高台付杯7は、体部が外傾しながら屈曲して口縁部に至る。9は直線的に口縁部に至り、体部外面に一条の沈線を施す。

碗10は、 P_1 から出土し、外傾した体部が、中位で直立・内傾し、口縁部は外傾する。口縁部外面にナデ、体部には削りを施す。

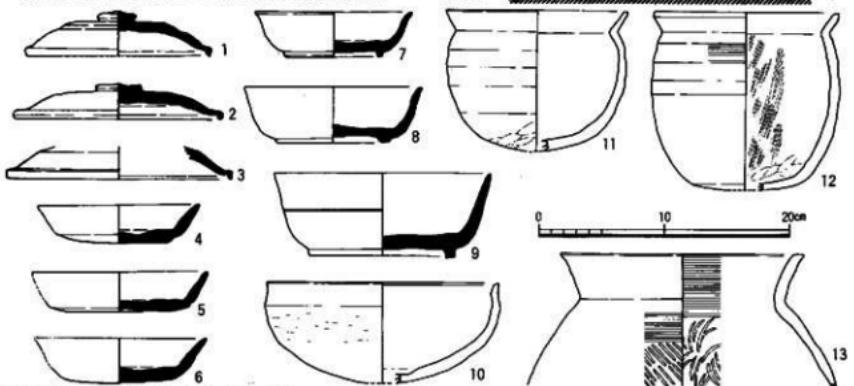
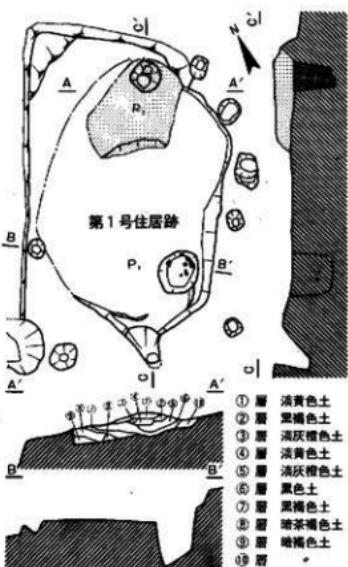
小形の甕11・12は、頸部基部「く」の字状に外傾し、端部が丸くおさまる11と直線的な12がある。

(3) 第1・2号穴 (第37図)

第1号穴は、第1号住居跡の南側約1mの位置にある。長径1.1m、短径73cmのタマゴ形を呈し、底面は丸みをもつ。出土遺物には、A杯5・6、高台付杯8がある。

第2号穴は、長径1.3m、短径1.15mのくずれた長方形を呈する。

底面は平坦で、壁とともに熱を受けた痕跡を残す。(池野)



第37図 遺構・出土遺物実測図 1・3・4・7・9~13. 第1号住居跡、5・6・8. 第1号穴、2. 包含層

IV まとめ

本調査を実施したNo16、No17遺跡、No18遺跡A地区の遺構・遺物を中心に、試掘調査結果を踏まえながら若干の検討を加えたい。

1. No17遺跡第1号墳について

第1号墳は、小丘陵尾根上に位置する単独墳で、分岐に伴ない、ふくれた丘陵尾根平坦面を利用して築造される。築造された尾根は低く、南側にのみ眺望が開ける。事実、墳丘南側の構築は丁寧である。

墳丘封土は、径15m、高さ1.4mで、地山層の整地、削平により直径30m、高さ2.9mと規模が2倍に拡大し、視覚的效果を高める。

墳頂部から墳頂部へは、約20度の傾斜をもって直線的に登り、墳頂部は約10mの平坦面を作り、古式の様相を示す。

埋葬施設としては、箱形木棺を直葬した土坑を検出した。木棺は、長さ3.7m、幅約80cmで封土中に構築される。副葬品は、蛇紋岩製の小形勾玉2個で、貧弱であった。蛇紋岩製の勾玉は、加賀片山津玉造遺跡〔大場他 1963〕に類例がある。出土位置は、中央部よりやや東側に寄り、胸の上のせられていたと仮定すれば、東枕であろう。

築造年代は、副葬品が少なく、古墳調査例が少ないと明確な点が多いが、一応、5世紀代の古墳と考えておきたい。

下条川右岸の金山丘陵地帯は、宿屋古墳のみが確認されていた状態で、空白地域であった。しかし、この地域に小松流通業務団地が計画され、事業に先立つ分布・試掘調査で古墳数も増加している。内訳は、五歩・古墳群（前方後方墳1、円墳2）、No7古墳群（円墳3）・No11古墳群（円墳8）・Q古墳（円墳1）で、No7・11古墳群は、調査が予定されており、成果が期待される。

2. No16遺跡第3号窓跡について

第3号窓跡は、単独に1基存在する。全体に遺存状態は良く、前庭部から煙り出しピットまで完存する。床面の平面形態は、焚口から逆「ハ」の字状にひろがり、最大幅は焼成部中央に位置する。焼成部の傾斜は、中央部で30度、煙り出しピット近くがもっとも急で40度をはかる。生源寺窓跡〔塙 1964〕では、中央で30度、煙り出し付近で25度をはかり、煙り出し付近に構造差がある。焼台には、河原石、甕破片が使用されるが、生源寺窓跡でも同様である。煙り出しピットには、排水溝と考えられる溝が窓跡外にのびる。類例は、6世紀後半～7世紀前半の石川県分校古窓跡〔田島 1972〕第3・4号窓跡にみられる。前庭部及び前庭部下方の急斜面上には、灰屑はみられず、壁、床面の補修を施さずに使用が中止されており、操業が短期間であったと考えられる。

出土遺物は少量であるが、杯・蓋・甕の器種がある。実年代は、金屋陣の穴横穴古墳群〔藤田 1976〕・上野遺跡〔橋本 1974〕に類似し、6世紀後半に属する。

県下の須恵器窓跡調査で最古に属するのは、大門町生源寺窓跡で、6世紀後半に比定され、第3号窓跡の西方約800mの金山丘陵中に位置する。また、やや新しい要素を含んだNo7遺跡窓跡群は、北東方向約400mにある。現在、金山丘陵で3遺跡5基が確認され、6世紀後半が須恵器生産の開始期にあたり、当地域における政治勢力が、工人專業集団に介在した時期と考えられる。

当該期の集落遺跡としては、南東方向1kmに上野遺跡があり、住居跡内から、生焼けの須恵器が多く出土し、特定の工人集団の居住地である可能性が指摘され、本遺跡群では、No7遺跡東斜面上から検出された遺構群が、それに相当する。No6遺跡出土遺物は、7世紀前半に比定され、立地、性格が似る。第3号窓跡前庭部覆土上層からは、7世紀後半～8世紀初頭に比定できる焼けひずみの生じた須恵器が出土した。少量の遺物であるが連続と連なり、奈良時代に入る。7世紀前半～8世紀初頭の須恵器窓跡は未発見であるが存在する漠然性が強い。

（池野）

(3) No16遺跡第2号窯跡について

第2号窯-IIの灰層は、土層観察で約2.5×数mの小規模なもので、生焼け品の割合が多いことから、排水施設の不充分さを解消するため、窯体の短縮を行い改良したものと推定した。第2号窯-Iの灰層は延長約30m以上に及ぶ大規模なもので、この両者を含めた窯操業年代が遺物の時期編として把握できるかが問題となってくる。

床面出土の杯蓋の比較では、最終床面にあたる第2号窯-Iの杯蓋が天井部周縁の屈曲が強くなり、端部が下方に長く伸びる等の新しい様相がみられた。しかしこの相違を時期差としても出土遺物を器種毎に分離することはできず、一括して取扱った。

遺物の時期は以下により、平城宮土器編年の平城宮II段階（略年代730年前後）【小笠原他 1976】に対比できる。^{註①}

- ① 窯Eの長頸壺は、口頸部中程に沈線を引き体部の屈曲部の鋭い形態は古い様相で、平城宮III以降は球形の体部に短い口頸部をつけたものに変化する。
- ② 鉄鉢は、平城宮I・IIで平底または丸底ふうをなし、平城宮III以降は尖底状が一般化する。
- ③ 杯蓋は、平城宮Iに比べてまみ部の直径が小径となり、口縁端部へは短く屈曲し、口縁部内面に沈線が入らない。
- ④ 窯蓋は短頸壺の蓋で、天井部の屈曲が直角に近く、角ばかり折れるものが新しい様相であり、口縁下部が外に開き屈曲点を丸くおさめるのは古い形態である。
- ⑤ 平瓶は注口の直径が小さく、肩部屈曲点が鋭く背面の盛上りが小さく平らになる等の変化は平城宮IIにみる。
- ⑥ 金属器の作波理鏡を模した杯は、平城宮IIに出現しており、杯Dの体部に陵をめぐらせる土器はそれに当る。

また第2号窯の器種を大阪市陶邑古窯跡群の調査成果【中村他 1978】と比べると、第Ⅳ期の1～2段階に含まれる。さて、北陸の奈良から平安時代の編年作業は、吉岡氏によりなされ、須恵器窯跡出土品を基準とし、該期の須恵器・土師器の器種構成・成形技法から3段階5時期に細分された【吉岡他 1967】。この成果を踏え小嶋氏は8世紀中葉から9世紀初頭に操業された金沢市末町付近の窯跡群採集品の検討から先の編年の修正と補足を行っている【小嶋 1975】。それは8世紀前半として示された春木3号窯式を大宝年間の所産とし、現在の平城宮Iに位置付けた。また長己支群のSS-02を平城宮IIに当て、吉岡氏が三浦中層土器と同時期とみなした和氣1号窯の土器を平城宮IVの主要遺構のSK219に求めて位置付けし、末支群のSS-01と三浦中層の一括土器を同時期として從来どおり8世紀末の平城宮Vのものとして把握した。また浜岡氏は吉岡氏の編年第4段階の洲衛第1号窯式と第5段階の戸津第4号窯式との中間位置をもつものとしては富末町小袋第1号窯を報告された【浜岡 1974】。

これとは別に宮本氏は浅川第1号窯の検討【宮本他 1976】から、高台付杯の全器種に占める割合が年代の下降と共に減少する傾向を数字で表わした。南氏は時期が新しくなるにつれ、杯の外傾度が大きくなる傾向を吉岡氏・宮本氏の考え方を基本に石川県内の地域毎の相間図として視覚的に表現し、加賀・金沢・河北・能登の地域型を示した【南 1979】。

一方富山県では、舟崎氏が主に、窯跡・集落跡を中心とした須恵器の体系的な編年を行った【舟崎 1974】。これとは別に藤田氏は立山古窯跡群5基の窯跡採集品から他地域との対比を行い、各々8世紀末～10世紀代の4時期に区分されるものとして編年付けた【藤田 1974】。また橋本・岸本氏はじようべのま遺跡の建物群が6期に分れることから、各建物群からの遺物を抽出し、建物群の変遷に対応したA～Eの5時期を各々8世紀末～10世紀初めに当るものとした【橋本他 1975】。また平城宮跡出土の灰輪・縁輪の年代観【高島 1971】【山中 1965】は、高島氏によれば1世紀～1世紀半のいずれが愛知県猿投窯跡群との間に生じ、ひいては三浦上層土器の年代観の混乱【藤田 1974】【橋本他 1975】となつた。小嶋氏は金沢市の観法寺遺跡を元慶8年または仁和元年(885)に定期寺として再建された跡と推定し、これに伴う上層出土土器が三浦上層土器に併行することから、その年代観を示唆した【小嶋 1977】。

上記のような、石川・富山県の研究現状の中にあって、No16遺跡第2号窯出土の遺物は、平城宮IIに相当するもので、器種が多岐にわたり、当期の須恵器の指標的存在をもつと評価できる。

昭和54年度 小杉流通業務団地内遺跡出土の奈良時代前半の遺物一覧表

杯蓋	杯	皿	高杯	壺蓋	壺				
壺	平瓶	横瓶	鉢	盤					
鉢	甕								
湯									
湯	窯道具	規	円板	黒色土器	椀	甕	場	土管	土馬

表2 器種表 (数字は図版番号を表わす・土馬は%)

第2号窯出土品は、平城宮Ⅰの時期とされる春木3号窯跡出土土器〔浜岡他 1965〕に比べ、長頸壺の高台の形態からも後続するといえる。春木3号窯跡では長頸壺・横瓶の存在が頗るな点もほど一致した傾向をもつ。また平城宮Ⅱに相当とされるST-02は、杯・杯蓋を中心とするため対比が限定されるが、杯蓋の形態は似る。

同じ金山丘陵では東方約1.8kmに天池窯跡があり、2基の発掘を行っている。この内第2号窯出土品の一部が報告され、8世紀前半の位置づけがされている〔舟崎 1974〕。遺物は共に窯体床面で焼き台として転用された杯・杯蓋が主体である。2基の窯跡の遺物は、細部の形態に相違があり、第2号窯跡出土品は8世紀中葉でも後半に下降しよう。

なお遺物の若干の補足を加えておきたい。杯蓋天井部のヘラケズリは、殆んど左まわり（逆まわり）である。また杯B（第19図22）は、美濃の刻印を施した須恵器生産跡で知られる岐阜県老洞第1号窯跡（8世紀前半）〔橋崎 1979〕の蓋に類似があり、橋崎氏は杯・杯蓋の外面に唐草文を陰刻した奈良県平城宮跡の東院地区発見例〔土肥他 1978〕の類似を示している。またヘラ書き文字は、須恵器例で県内3例目にあたる。当遺跡例は人名を記しており、窯の工人集団とどのような関連をもつものか今後論議されよう。

No16遺跡の第2号住居跡及び周辺の遺構は、出土遺物から第2号窯跡と一連のものである。

No18遺跡A 地区について

発掘対象地は遺跡縁辺部に当り、遺構は住居跡と同時期に属する。また出土遺物は住居跡等に伴う一括土器であり、No16遺跡第2号窯出土土器に比べ、杯蓋のUJ端部の形態・小型窓のUJ端部が若干内溝みになるなど後出的な様相をもつ。口縁部の形態は天池第2号窯跡出土例に似る。時期は周辺の調査をまって決めたい。 (上野)

註① 美口から焼成部にいたる焼成溝を中央・側壁際の床面に1~3本設け、溝上を焼片で被覆する例は、大阪府陶邑古窯群で7例みられる。列記するとTK47号〔田辺 1966〕、KM126号・KM268号〔中村 1976〕、TG22号・TG208号〔中村他 1977〕、TK103号・TK37号〔中村他 1978〕で、KM268号を除いては、第1期に属する窯跡である。

註② No16遺跡の輪郭の位置付けについては、吉出恵二氏の教示による。記して謝意を申し上げる。また天池窯跡をはじめとした奈良時代の須恵器については、橋本正・池野正男氏との共同討論でえたものを上野がまとめた。不充分な箇所は、筆者に責がある。

註③ ヘラ書き文字は富山市金草第1号窯出土の杯蓋外面に記した例〔県史考古編577頁の4〕〔岡崎 1972〕と高岡市東木津遺跡出土の須恵器杯蓋外面例がある。

参考文献

- イ池野正男・山本正敏・酒井重洋 1979 「富山県小杉町流通業務団地No20遺跡緊急発掘調査概要」富山県教育委員会
大場雄輔編 1963 「加賀片山津玉造遺跡の研究」加賀市教育委員会
岡崎卯一 1972 「須恵器と窯跡」「富山県史」考古編
コ小豆好房・西脇 浩 1976 「V型窓・2上器」「平城宮発掘調査報告書」奈良国立文化財研究所
小島芳孝 1975 「金沢市本町付近の窯跡群とその歴史的性質」石川考古学研究会誌第18号
小島芳孝 1977 「弥勒寺推定地について」石川考古学研究会誌第20号
シ 嶋大 1965 「生涯遺跡調査報告書」
タ高島忠平 1971 「平城京東三坊大路東側溝出土の施釉陶器」「考古学雑誌」第57条第1号
田辺昭三 1964 「須恵器製作技術の再検討」考古学研究第11卷第2号
田辺昭三 1966 「陶邑古窯跡群」平安学園研究論集10
田島明人 1972 「加賀市分校古窯址群調査概要」加賀市教育委員会
土記 孝・安田龍太郎 1978 「平城宮跡と平城京跡の調査」「奈良國立文化財研究所年報」奈良國立文化財研究所
ナ中村 浩・尾谷雅彦 1976 「陶邑」大阪府文化財調査報告書第28輯 大阪府教育委員会
中村 浩・高島 雅也 1977 「陶邑」大阪府文化財調査報告書第29輯 大阪府教育委員会
中村 浩・河代克己他 1978 「陶邑II」大阪府文化財調査報告書第30輯 大阪府教育委員会
橋崎久雄 1979 「第二部 歴史時代」「岐阜市史」史料編考古・文化財
ハ橋本 正 1974 「急速自動車国道北陸自動車道岡田埋蔵文化財緊急発掘調査報告書 小杉町上野遺跡一記録写真編」富山県教育委員会
橋本 正・岸本雅敏 1975 「入善町じょうべのま遺跡発掘調査概要(3)」入善町教育委員会
浜岡賢太郎・堀井 亮・橋本恭夫・占間東輔 1965 「飛鳥尼原古窯跡群の調査(第一次)」石川考古学研究会誌第9号
浜岡賢太郎 1974 「給分小窓1号窯跡」「富善町史」資料編
舟崎久雄 1974 「富山市における須恵器の輪郭」「富山県埋蔵文化財調査報告書富(高島編)」富山県教育委員会
藤田富士夫 1974 「富山県立山古窯跡群」考古学ジャーナル第97
藤田富士夫 1976 「富山市古沢・金剛山地内古窯概要調査報告書」富山市教育委員会
マ町田京 1975 「V型窓」「C型窓」「平城宮発掘調査報告書」奈良國立文化財研究所
南 久和 1979 「金沢市黒川町遺跡調査報告書」金沢市教育委員会
宮本哲郎・伊藤延隆 1976 「浅川田1号窯跡(底床)調査報告書」金沢市教育委員会
ヨ吉良康輔 1967 「加賀三浦遺跡の研究」石川考古学研究会

No. 9 遺跡



1.遠景南から
2.溝



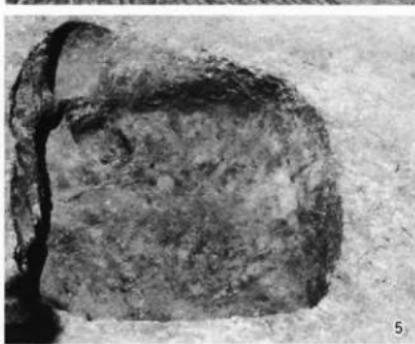
No.13遺跡



3.遠景東から
4.墳状造構



5.穴-13
6.穴-6



5



6

No.16遺跡



7.遠景東から



1.第3号窯跡
全景



2

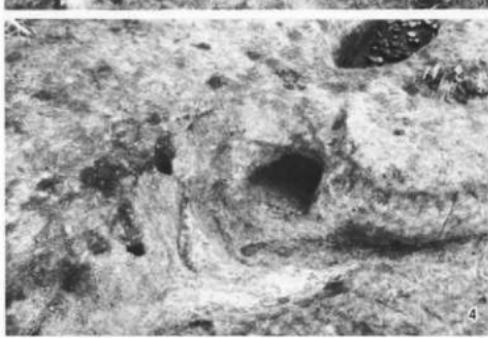


5

2.天井部残存
状態
3.排水溝
4.煙り出し
5.遺物出土
状態
6.土層セクシ
ョン



3



4



6

図版2



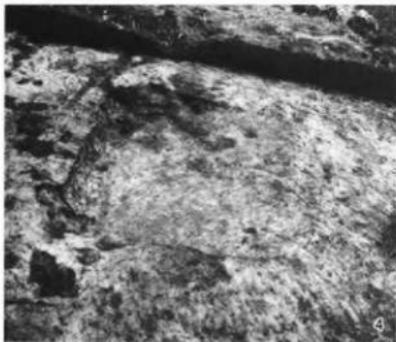
1. 第2号窯跡
全景



2. 近景
3. 調査風景



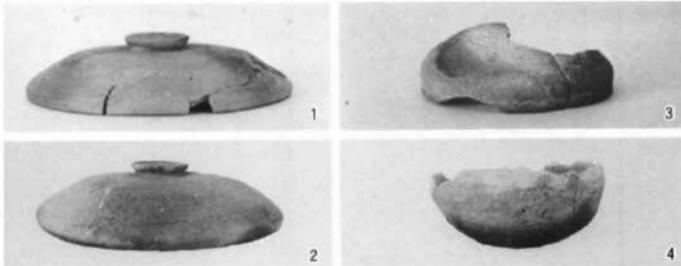
4. 第2号住居跡
5. 段状遺構



6. 第1号穴
7. 第3号穴土層セクション



No.16遺跡
出土遺物



1~4.第3号窯跡



5~26.第2号
窯跡

図版4

No.16遺跡
出土遺物



1~19.第2号
窯跡

No.16遺跡
出土遺物



1.遠景東から



2.第1号墳
近影
北東から



3・4.埋葬施設

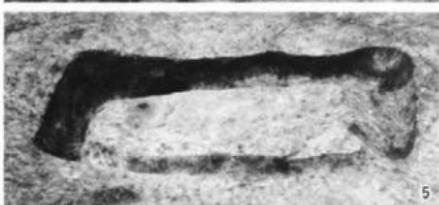


3



2

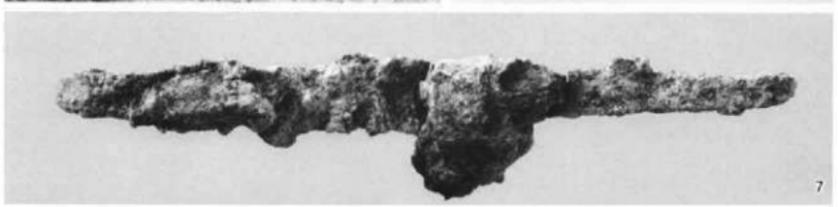
5.第1号木棺
墓
6.第1号墳
出土遺物



5

4

7.第1号木棺
墓
出土遺物



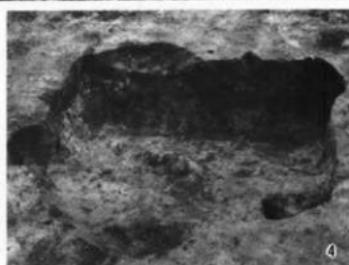
6



1. 遠景西から



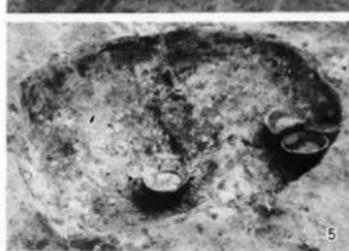
2. 第1号住居
跡
3. 遺物出土状
態



4

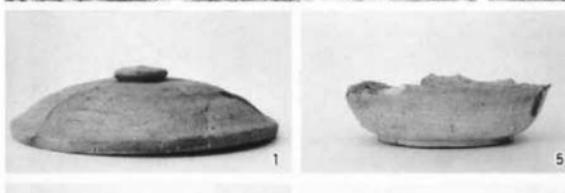


3



5

4. 第2号穴
5. 第1号穴



1



5



9



2



6



10

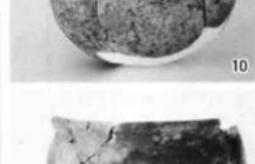
1・2・5・7～11。
第1号住居
跡



3



7



11

3・4・6、第1号
穴



4



8

富山県・小杉町・大門町

小杉流通業務団地内遺跡群

第2次緊急発掘調査概要

発行日 昭和55年3月31日

発行者 富山県教育委員会

編著者 上野章・池野正男

印刷者 中村印刷工業株式会社